昭和46年11月14日発行通巻36号(毎日曜日発行)　昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

AE 朝日=ラルース

11/14

220円

36

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

目　次

世界動物百科　第36号

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　動物を機械的に五十音順に並べたものではありません。系統だった分類に従って，われわれの親しみやすいサル類から始め，次の順序と冊数でお届けしています。概説(2)，哺乳類(62)，鳥類(64)，爬虫・両生類(16)，魚類(16)，軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物(32)。《1～64号の内容は表3参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけではなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとにその総目次をつけ，また最終192号には詳細な総索引をつけます。この両者によって，動物界の構成がひと目で理解でき，調べたい動物がすぐ引きだせます。

『私たちの仲間』のページ　カラーページをより理解しやすいものにするため，日本の第一線動物学者の執筆による解説や注があります。また〝動物週刊誌〟として，動物界のニュースや話題，楽しい読物，実用記事などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を，発行順に16冊ずつ，美しいファイル（販売中・定価600円）に，とじこんでください。堅牢で豪華な，全12巻の〝動物百科事典〟がそろいます。途中から購読されたかたは，ぜひ第1号からおそろえください。バックナンバーのお求めは，このページ右欄『本誌の購読について』をごらんください。

凡　例

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要なものには，その語のあとに〔注1〕と番号を入れ，『私たちの仲間』第27ページに，同番号で記載した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。
和名の多いものについては，併記したものもあるが，専門家と相談のうえ編集部で決定した。
和名のないものは，英名または仏名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または，現地読みを原則としたが，慣用の固定しているものはそれに従った。

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。
毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。
なお，本社直接購入のご希望は，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100　TEL 03－212－0131
朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530　TEL 06－231－0131
朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802　TEL 093－53－1131
朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460　TEL052－231－8131

次号予告

11月10日発売



世界動物百科
37号　11／21

カラーページ

食肉目　鰭脚亜目
□アザラシ科
ゾウアザラシ属
ズキンアザラシ属
ズキンアザラシ
モンクアザラシ属
タテゴトアザラシ属
タテゴトアザラシ
ゴマフアザラシ属
ゴマフアザラシ

私たちの仲間

荒野に生きる家族《上》　H.グドール
あるキンイロジャッカルの一家　（抄訳）藤原英司
動きのにぶい動物の大移動　G.5プラス1
もうひとつの世界　24
漢字のふるさと　28　藤堂明保
アザラシの研究　1　西脇昌治
カラーページ解説
鎖とゲンコツと　畑　正憲
ヒグマと2人のイノシシ　35
〝大熊〟と〝小熊〟の悲話　水野良平
夜空の動物たち　4
飼育自慢　4
ヘラジカ〈熊本動物園〉

私たちの仲間

36号…11月14日

〝オオカミ少年〟の科学

——オオカミは人間を育てるか

小原秀雄



カピトリノのオオカミ　伝説によれば，ローマの建国者ロムルスとレムスのふたごの兄弟は，この雌オオカミに育てられたという

1968年1月14日トルコからの外国通信によると，アンカラの北西部ボルー地方のある村では，その当時2メートル近くあった積雪のために，飢えにかられたものか，オオカミが村人を2人殺し，そして食べたという事件が起きた。人食いオオカミの出現である。

これとは対照的に，オオカミに人間が育てられたという話がいくつかある。たとえば，後述のオオカミ少女アマラとカマラの話のほかにも，1850年，当時英領だったインドのヒマラヤ南麓の英軍司令，W. H. スリーマンは，次のような見聞の記録を残している。

インドのオオカミ少年

スリーマンが支配していたコウンポール，ラックナウの一帯には，一時は，オオカミが非常に多かった。そのため，子どもがオオカミに連れ去られる事件が続発した。

ある日，土侯の家臣に当たる2人の男が，所用でグーンブチェ川の岸をウマに乗って通っていた。そのとき，なにやら3頭の動物が，水を飲みに現われた。2頭は明らかに子オオカミであったが，もう1頭はなにかはっきりしない。かれらは，3頭をまんまと捕えたが，よく見てみると，その最後の1頭ははだかの男の子だった。その子どもは，2頭の連れだった子オオカミと同様に，四つんばいで走り，捕えられそうになると激しくかみつき，ひっかいたのである。

子どもは，ラックナウに連れてこられた。そしてついに，ことばを使うことはできずじまいだったが，身ぶりによる理解はきわめて早かった。結局この子どもは，ラックナウの精神病院で一生を終えたという。

この子どもについての記録は，これにとどまっているが，おそらくスリーマンが思い浮かべたのは，そのころオオカミに赤ん坊を連れ去られるできごとが，かなりひんぱんに起こっていたので，その子がオオカミに養われたのだという考えであろう。

スリーマンのこの話は，これだけでは信憑性に欠ける。この男の子は狂人ではないにしても，野生児であって，たまたまオオカミといっしょにいた，唖だったのかもしれないからだ。

だが，その当否の問題はしばらくおくとして，オオカミに養われた子ども〝オオカミ少年・少女〟の話は実に多い。スリーマンは5件も例をあげているし，そのほかにも，最近までインドでのオオカミ少年・少女の話は，ときどき外電に顔を出す。

いろいろな「オオカミ観」

〝ヒヒ少年〟，〝カモシカ少年〟（ガゼルボーイ，あるいはレイヨウ少年）なども跡を断たないが，なぜかオオカミ少年はインドに多く，世界的にもやはりオオカミがずば抜けて多い。オオカミは，日本ではかつて大神としてあがめられ，魔除けとして頭骨が使われた。インドでも，神的な存在とみなす傾向が一方にあり，そのオオカミの心にすがって，さらわれた子どもの無事を祈るといったことが，オオカミ少年・少女を生みだしたものかもしれない。また後述のように，インドのオオカミが小型でかなり特殊な形質をもっており，人間と独特の関係を結ぶものと考えられていることに，根ざしているのかもしれない。

オオカミへの恐怖と実態

他方，オオカミに襲われた身の毛もよだつ話も多い。「群狼」「餓狼」「送り狼」といったことばは，人間のオオカミに対する恐怖を象徴する。欧米においても，恐怖の「狼男」の話がある。また武勇を尊んだヨーロッパの王侯貴族は，オオカミの名をその名に取り入れもした。アメリカインディアンは，もっとも勇敢な戦士にオオカミの名をつけた。そのほかこれに類することは各地に多い。

恐怖のシンボルと，人間の友という，この一見まったく異なる人間への態度がオオカミの本来の性質なのだろうか。

ローマ建国の偉人ロムルスとレムスの双生児は，オオカミによって育てられたというが，この話にはやさしさと強さとを〝兼備〟したいとの願いが込められているともみなせよう。現代的にいえば，オオカミもジキルとハイドのような両性をそなえた，人間に近い知能的な動物だということなのだろうか。実は，オオカミに限らず，ある点では，猛獣はすべてそうなのだともいえるのだが，その結論に到達する前に，オオカミの性質と実態をもう少し見てみよう。

オオカミが人間を襲うことは，なにか当然のように思われている。しかし，この点について，確かな証拠を調べてみると，それは意外に少ないのだ。19世紀に，イヌ科動物の大著をあらわした権威者マイバードが，1875年にロシアでは，161人がオオカミに殺されたと述べている。これだけがほとんど唯一の，オオカミの人間襲撃についての統計的な記録である。冒頭にトルコの例をわざわざもちだしたのは，これが，オオカミによる人間捕食の数少ない確かな記録だからである。日本でも，ヒグマとは違って，オオカミによる殺害の記録は少なく，人間を食ったものは皆無ではなかろうか。

北アメリカでは，もっと少ない。アメリカ合衆国猟政局の世界的なオオカミの権威ヤングは，過去25年間において，オオカミに人間が襲われたというニュースが，猟政局に直接もちこまれた際に調査してみると，すべてが噂にすぎぬことが明らかになったといっている。また，ある報告によると，カナダのオンタリオ州では，オオカミの生息密度が世界有数であるアルゴンクイン・ナショナルパークで，毎年何千人という子どもが野外キャンプをしたり，遊んだりしているのに，だれもオオカミに襲われたことがないのはもとより，おびやかされたことさえなかった。

前述したソビエトでも，有名な哺乳動物学者のオグネフその他の学者は，オオカミが人間を襲うことは，「ごく少ない」といっている。フィンランドでもスウェーデンでも同様である。つまり，北アメリカはもとより，ユーラシアでも，オオカミによる被害はほとんどないのである。

日本におけるオオカミ

日本での歴史的な事実のなかにも，オカカミに襲われた話はいくつもあり（野イヌとの混同もあるが），なかには妻が夫の仇討をしたとか，子どもがオオカミと戦ったといった話も多い。

長野県の松山義雄氏が集められた山村動物誌には，明治以後のいろいろなオオカミの伝聞が収録されている。

70年ほど前，緑が川に映えるころ，信



精悍なアラスカオオカミの表情（上野動物園）

州伊那里村中尾部落で，黒川の河畔に遊び戯れる少年たちに，川上から「やめえ犬（病狼）が出たで，よけろョー」と知らせる声がかかった。少年たちは先を争って逃げだしたが，１人の少年は自分の着物の裾を踏んで転倒したところを，不運にもオオカミに食い殺されてしまった。少年は，いつも「俺の着物の丈が長すぎるから短くしてくれ」と，母親にせがんでいたというのも哀しかった。

また，明治の末ごろの同村中尾部落小字丸山では，たんぼに「病狼」が２頭，しかも白昼うなって寝ているので，猫の手でも借りたいほどの多忙な秋の日ではあったが，だれもあえて稲刈りに田へ出る人はなかったそうである。

また，上伊那郡南箕輪村沢尻では，明治５，６年のころ，オオカミが次々とイヌを食い殺してしまうので，イヌを飼育することができなかったといっている。

よく注意してみると，これまでの例に示されたのは，いずれも病気のものなのである。それ以外はほとんど人間を直接襲撃したことは少ない。

世界的に見ても多くのトラブルは，やはりオオカミが家畜を襲い，その結果人間とのあいだに紛争を起こし，それによって人間にも害を加えるということなのである。

なぜ人間を襲わないのか

さて，人間を襲わないとすれば，また新しい疑問が発生する。それはなぜなのかということである。猛獣のこのような人間に対する態度は，いくつかの疑問を生じさせる。

オオカミは，走行による大型動物の捕食者としては，進化の頂点に達したものだ。１頭でもシカを殺せる。その殺戮に際して，チームワークを働かせることは，写真などで実証されている事実である。

このような群れの協力による狩りは，アフリカのリカオンやアジアのドール（アカオオカミ）にも見られる生活様式である。この協力によって，ドールはトラをも恐れないなどといわれるが，それにもかかわらず，リカオンもドールも，ほとんど人間を襲うことはない。いくつかのオオカミよりも，少ない例を散見するだけである。

だが，これらの動物が知能が高く，必要とあればトラやライオンのような猛獣たちにも相対するというのに，なぜオオカミを含めてかれらが，人間を避けるのかは不思議である。ナチュラリストのなかには，インドのドールは，イヌそっくりの性質をもつという人さえある。これらは，イヌ科ではあっても，オオカミよりははるかにイヌとは縁が遠いものであるのに――。

イヌ科のものたちは，知能的であり，ときにはオオカミがナシを食べたというように，個体としては食性に融通がきくのであるが，全体としては，大型獣を殺して食べる食性を固持する。それは実は群れの結びつきがかたく，獲物を分配して食べる性質と関係が深いようだ。

ともあれ，そのメニューにはいっていないヒトは，かれらが極度に飢えているときでもないかぎり，見て見ぬふりをされるようだが，イヌ科の動物たちには，このような共通する性質があるのだろうか。人間のもっとも忠実な家畜であるイヌを生んだイヌ科の動物には，人間とは特別な関係をもつべき自然の性質がある……とまでは考えにくいのだが――。

この論究は，まだまだつきるところがない。実際，哺乳類の各種，あるいは各科などの独特の性質には，その実態の不明なものが数多くある。これも，その１つの例ということができるだろう。

この問題は，オオカミのもう１つの性質である人間を養うこととも関係する。オオカミが正常なときには，人間を攻撃する性質をもっていないのだとするならば，人間はオオカミに近づきやすいことになる。かれらが人間に特別の親しみをもつとすれば，いっそうその可能性は強まるだろう。

オオカミ少年と少女の話は，インドに多いという。キプリングの『ジャングルブック』は，人間社会へのさまざまな示唆に富んでもいるが，人間と動物に対するいくつかの見方をも含んでいる。それは，インドにおけるオオカミについての畏敬，期待といった心情をあらわしている。

インドオオカミは，小型で別の種と思われもしているオオカミである。

このインドのオオカミと，ローマのロムルスとレムスのオオカミとでは，かなり違うように思えるが，実はこのイタリアのオオカミは，地中海産の小型のオオカミ（学者によってはイタリアオオカミ *Canis lupus italicus* と区別する）でインドオオカミに近いといえる。イヌの先祖について，欧米での多くの見解は，地中海産の古い小型のオオカミとみなしている。ローマ建国にまつわるオオカミ少年の物語と，インドのオオカミ少年・少女とは，このイヌ化への可能性を秘めた，いっそう人間に近づきやすいともいえる，小型オオカミにまつわるものなのである。

ジャングルを出た２人の少女

1920年10月，インドのミドナポール教区の責任者のシング牧師は，ゴダムリという村で，近くのジャングルにいる男の化け物の話を聞いた。そして10月９日の夕方，シング牧師はその化け物の正体を見た。１人ではなく，２人いたのである。この頭の毛のもじゃもじゃとした２人の人間は，オオカミに続いて穴から出てきたのだ。10月の中旬に，この２人，のちにカマラとアマラと名づけられたオオカミ少女が捕えられた。

牛車にひかれて１週間，1920年11月４日，一行はミドナポールの孤児院に到着した。

食べ物と，それ以外のものとしてはシング夫人のマッサージだけが，オオカミ少女たちがまず受け入れたものだった。そして少女たちは，イヌのように四つんばいで動き，食物を皿からなめて食べた。そして遠ぼえをし，夜になると目をらんらんと輝かせ，行動は大胆になった。

カマラは，当時８，９歳と推定された

“オオカミ少女”カマラの生涯

1920・10・9　シング牧師が目撃する。
1920・10・17　カマラはオオカミのところから連れてこられ，しばらく村人の庭に置き去りにされた。
1920・11・4　シング牧師によって孤児院に連れてこられた。
1920・11　昼間は床にうずくまって壁のほうを向いている。夜になると，戸外を四つ足で走るか，両手とひざを使ってはう。オオカミのほえ声はたてるが，人間の発音はできない，食物をぺちゃぺちゃなめて食べる。腐肉を食べる。子どもたちがそばに寄ると，歯をむきだし，いやな声をたてる。暗やみをこわがらない。
1921・春　子イヌや子ヤギやニワトリやネコは好きだが，子どもたちはそばへ寄せつけない。シング夫人に対しても親しみをみせない。
1921・9・21　アマラの死に際して涙を２粒落として泣く。顔の表情なし。
1921・11・21　場所をゆずって，シング夫人をすわれるようにしたり，夫人の手を自分の胸にあてて注意を引こうとしたりする。



カマラは，水やミルクを飲むときも，食べ物を食べるときも，いつも地べたで，イヌのようにペチャペチャとなめるのだった
この習慣は２年間つづいた
（1920年　孤児院にきた年　８歳）



カマラとアマラは孤児院にきてからも，ずっと，オオカミのほら穴のなかで仲間のオオカミとしていたように，たがいに重なりあって寝た
（1920年）

が，そのからだの動かし方はオオカミそっくりで，ひざと手か，または手足で走った。最後までカマラは両足で歩くのがやっとで，立って走ることはついにできなかった。しかも急ぐときには，また四つんばいにもどってしまうのだった。ときどきニワトリを追いかけ，それをくわえると四つんばいで茂みに駆けこみ，食べたりした。

2歳ほどとみられたアマラのほうが，より早く人間的生活に適応した。それがカマラのささえであったが，その後1年たたぬうちにアマラは死んでいった。

カマラは，しだいに人間生活になじんでいき，いくつかのことばを覚えて，シング夫人への愛着を示すようになっていった。そして1926年になると2本足で歩き，オオカミの習慣をほとんど忘れたという。

オオカミ少女ははじめの1年めには，暗やみでも平気であり，それでいて眠る時間は少なく，正午ごろと真夜中とあわせて，1日4時間ぐらいであった。そしておりの中のけもののように，1日17時間を，ほかの子と交わることなく，ひとりで片すみに起きていた。

しかし，しだいに他の動物（子ヒツジなど）への愛着を示すようになり，それ以来，人間への親愛感をいっそうはっきりともつようになった。やがてカマラは，明るいときにも行動するようになったが，1929年11月14日，尿毒症でその生涯を閉じたのである。

これらのシング牧師の記録こそ，その後幾度かの論争と，衝撃とを与えたものであった。1940年に1つはデンバー大学のシングによって論文として，もう1つはアーノルド・ゲゼルによって1冊の本として，これが欧米に紹介されるにいたったからである。

オオカミ少女への疑惑

この〝オオカミ少女〟は，人間とは……を考えさせる対象となった。フランスの有名なアヴェロンの野生児と同様に，人間は人間化されないかぎり，人間形成が自然に本能的に行なわれるものではないという点で，教育者に1つの実証的根拠を与えた。『狼に育てられた子』の冒頭に，著者の元エール大学教授で，のちにゲゼル児童研究所を設立したゲゼルは，「少女カマラの不思議な生涯を分析していくにつれて，われわれは，人間性の真髄と，人間の成長のポテンシャリティーを，あらためて信ずることのできる根拠を，あたえられたように思うのである」と感動的にその序を結んでいる（生月雅子訳書より）。

当然のことながら，人間の性質をどのように見るかで見解を異にする人，あるいは可能性を無限と見ることに反対し，もっと実証を尊ぶ人びとからは，低能児であったのだとの総反撃が加わった。それに加えて，やはり精密さを要求する科学の側からは，直接的証拠か，トレーニングを身につけた人間による観察を要求するのは当然であろう。それは西欧的科学の限界を示しはするが，なによりも健全さを示してもいるのだから。

行動的なアメリカ人は，それに応じて調査を試みた。1951年にオブバーンという社会学者が，ボースという人類学者とともに，調査に当たった。ミドナポール地区での精力的な聞き込みにもかかわらず，オオカミ少女が捕えられたといわれる場所にもっとも接近しているゴダムリという村は，ついに発見できなかった。そしてかれらは，数人の目撃者を捜しあてたが，それらの人びとは，子どもたちは牧師のシング氏のもとに「連れてこられたのだ」といいはった。他の人びとは，この牧師は不誠実で，嘘つきだと証言した。

かつてイギリス人のドーソンは，古人類の化石を偽造したが，かれが死ぬまで，その化石の実態は知られず，かれは墓場へその秘密をもっていったのだった。だが，かれが死んで，この曙人と呼ばれた化石の嘘は白日にさらされた。

シング牧師も，このオオカミ少女の秘密を抱いたまま，墓場にいった。写真と日記とが，オオカミ少女の実在を示す唯一の証拠である。しかも，それには傍証はなかった。これが真実ならば，ゲゼルの序にあるような考えを「実現化」した例である。人間の尊厳を考え，学習のすばらしさを導きだす実例である。

多くの学者も，このアメリカの調査が1959年に報告されるまでは，この実在を半ば信じていた。しかし，この報告以来，人びとは，「オオカミ少女」を密林のなかで発見された低能か，連れられてきた精薄の子だと考えるようになった。

確かにこの記事のなかに出てくる例は，通俗化されたオオカミのイメージに，あまりにもよく適合している。したがって，そこから逆に，この話の嘘を見いだすことはわたしにもできる。そしてまた，あるアメリカの心理学者が，精薄児その他の行動として，カマラとアマラの行動のすべてが説明できるといってもいる。が，すべてをそうでなく考えることも不可能ではない。

刷り込みと学習

その詳細は，主題からそれるので省略するが，哺乳類の子どもは生まれてから成獣になるまでの間に，体機能の発育の順序にしたがって，行動の型が身についていく。できあがってから，本能のように，1つの刺激に対応して働く型（それが生活に適している）が，全体として種の生活様式となり，それが完成し身について，はじめてその種の1個体としてふるまうようになる。

実はその点で親と子，他の成獣と子との関係によって，あたかも学習するようにして，外部の刺激とのあいだに1つの

1922・3・2　両ひざで歩く。疲れると四つ足で歩く。長椅子で，腹をささえながら，自分ひとりの力で，直立の姿勢をとることができる。

1922・5・24　すねと足指に体重をかけて両足で立つ。



孤児院へきて3年めになっても，カマラは死んだニワトリの内臓をつかみだして食べたりした　（1922年　10歳）

1922・8　ひざで立ち，両手を自由に使って皿から食物を食べる。飲み物のときは首を曲げ，口を皿につけてぺちゃぺちゃなめる。

1922・11　シング夫人のことを「マー」と呼ぶ　また，腹がすいたりのどがかわいたときには「ブー・ブー」という。

1923・6・10　はじめて，ささえるものなしにひとりで両足で立つ。

1923・秋　ニワトリのえさにたかる鳥を追いはらう。こまをまわそうとやってみるが失敗する。

1923・12・20　頭を振ってイエス・ノーを表わす。イエスのときに「フー」（ベンガル語）という。

1924・1・9　暗やみをこわがる。あちこちと気を配り，みなにしっかりくっついて歩く。

1924・1・28　シング夫人の帰宅を喜ぶ。迎えにとびだし，夫人に身をこすりつける。

1924・1・29　朝食のときにだれも教えないのに「バー」（御飯の意）という。

1924・3・13　〝I will〟の意味の「アム・ジャグ」ということばがいえる。

1925（通覧）　コップで水を飲む。自分の皿とコップを覚える。

1926・1　30語を使うことができる。

1926・1・23　わけのわからないことばをしゃべる。「ママ，いらっしゃい」という意味の「マ・エロ」ということがいえる。

1926・1・29　年少の赤ん坊たちと散歩をする際，両足で立って歩く。

1926・6・7　腐肉を食べることを拒否する。

1926・10・10　けがをした赤ん坊の世話をしたことに，喜びの情と，自慢の気持を表わす。

1926・12・6　恥じらいを示す。着物を着てからでないと，寄宿舎から外へ出ない。

1926（通覧）　簡単な走り使いをする。口でいいつけたことを理解する。台所へいって，子どもたちがミルクをほしがっているということをことばで伝える。



夜になると，カマラはおちつきを失い，動作が活発になった　扉のところへはっていき，扉を手でひっかきながらオオカミのような声でほえた　（1923年　11歳）

1927・1・14　45語を使うことができる。子どもたちの顔を覚え，名まえの最初の字，もしくは最初の2つの字で子どもを呼ぶ。

1927・3・17　自分の人形を入れる，函のはいっている小箪笥を子どもたちに見せて，「人形が函の中にある」という意味の「バグ・ブー・ヴォ」ということばをいう。

1927・10・29　子どもたちが，カマラを置いて市場へいったので，涙をボロボロこぼして泣く。

1927・秋　赤ん坊たちに気をつける。いいつけられないのにニワトリ小屋にいき，戸に鍵をかけ，卵を集めてくる。そのことをほめられて喜ぶ。

1928・8・10　ぶらんこの番を待つ間をじれったがる。

1929・9　発病。

1929・9　自分の使っていることばの意味を，自分でよく理解しながら自由に話す。

1929・11・4　はじめて会う2人の医者を見分け，2人の名まえを覚え，どちらの名まえがどちらの医者のであるかを知っている。

1929・11・14　シング牧師の経営する，孤児院の少女カマラ（世間では狼っ子といっている）は，尿毒症のため，今暁4時に死亡したことを証明する。自分は病気の後半において，この少女の治療に当たった。（S・P・アサルバドヒカリ）

オオカミ少女の写真・年表は『狼に育てられた子』（ゲゼル著，生月雅子訳，家政教育社，昭和42年刊）より　転載イラストは，同書の写真をもとに作成（イラスト　清水勝）



アラスカオオカミの雌（手前）とチベットオオカミの雄
仲むつまじく，まるで子イヌのように戯れあう情景がよく見られる　（上野動物園）

すじ道がつくのである。この働きを「刷り込み」（インプリンティング）と呼ぶようになるのだが，このときの条件が作用するため，ときに刷り「違い」も起こってくる。このほかに，哺乳類などでは，忘れたり，経験が積まれる学習も行動を形成することが多いが，行動の基本はほぼこれで決まり，おおまかには，種の生活様式が身につくことになる。

オオカミがオオカミになるには，遺伝的形態だけではじゅうぶんでなく，それに対応した行動の型が形成される必要があるわけである。子は親のまねをし，ある場合には遊ぶような行動のなかで，それが定型化する。オオカミの子は，あるわずかの時期に順位が定まるといわれるが，それはこの1つである。また獲物のとり方も，「刷り込み」に基づき，その後の学習も加わって形成される。

人間でも，食べたり，寝たり，排泄したり運動したりするような生活様式は，同じように形成されるのではないかと考えられている。とすれば，条件さえ整えば，人間のオオカミ化は，ありえないことではないだろうし，この話が信頼できないと頭から決められない点がある。

また，仮りに低能児であったとしても，人間の学習能力を示し，「立つ」というような基本的な行為のメカニズムを考えさせるものをもつ。あるいは，たんなる野人化した生活をしていたとしても，オオカミのような生活様式をもつにいたったのはなぜか，といった点で，人間に関する検討の素材にはなりつづけよう。

人間を養う可能性

だが，目下の主題は人間性にあるのではなく，オオカミが人間の子を養う可能性の有無である。この点ではどうであろうか。前述のように，オオカミが人間に示す無害さから，その可能性は考えられそうである。

ここでわたしは，幾度か人間の子，よちよち歩き程度の子にもっとも多いが，かれらが野生動物に対してなんらの恐れも知らずに近寄っていくことや，イヌに対する一体化した親愛の情（親が子に恐ろしさを教えれば別になるが）の表出を思いだす。これに対して，動物のほうもまた，成人に対する警戒心とはまったく違う反応を示すものだ。よほどそばへいっても，逃げたりはしない。

野においても，子どもは同じ行動をするだろう。オオカミに対したときにも，子どもはこの天衣無縫さで近づいていく可能性がある。

さてニューヨーク自然史博物館のグッドウインは，ネコが自分の子を失うと，ときにはウサギの子を連れてきて養うことがあるから，オオカミもそれをやる可能性があるといっている。少なくとも千に1つの可能性はあると同氏はみなしている。

オオカミはまた，主として嗅覚によって子を識別する。子オオカミは，人間に対して，ましてや恐れを知らない。そして，オオカミの子と人間の子とが遊び，それらのにおいが混合する可能性はある。

有名な動物行動学者のロレンツは，ディンゴの子をイヌに育てさせたが，そのときにはディンゴの子にイヌのにおいをつけ，巣の外にわざと置いて，結局運びこませることに成功した。直接中に置いたのでは，うさん臭く感じさせたからである。同じことが，子オオカミと遊んだ人間の子が，オオカミの巣から少し離れたところにいた場合に起こらないといいきれるだろうか。

子を失った，子持ちの雌オオカミではなくとも，このような偶然は起こりうることだろう。ただし，インドでの多くの赤ん坊の略奪は，人間の子を食べ物として行なったものと考えてよいだろう。そうだとすれば，かれらがその子を育てる可能性は薄いといえる。ただし，赤ん坊を盗んだのが，はたしてオオカミであったかどうかは疑問である。むしろ，ハイエナやジャッカルによる可能性のほうが高いのだ。だからこそ，なんらかの理由で，人里離れた世界に置き去られた人間の子に訪れる，万一の僥倖が考えられるのである。

さて，一度巣の中へはいりこんだ場合，その子はどうなるのだろうか。オオカミの子たちは，生後4～8週間で離乳して巣穴を出て生活し，10～12週間すると，別の集合地とでもいうべき場所で，食物を運ばれるのを待ちながら，親たちの群れが狩りにいっている間を過ごしている。巣穴の中で1頭の雌の子として育ったものたちが，こうして群れ社会に加わっていく。

『ジャングルブック』のなかにも，オオカミの集会があり，母が自分の子モーグリを，仲間に披露する場面がある。リーダーのオオカミが，「よく見てみよ」と岩の上でほえたてて，モーグリを群れと対面させる。キプリングの小説では，擬人化されているが，この集合地では，人間の子はいったいどうなるのだろうか。オオカミは嗅覚にたよるとはいえ，視覚も働くのだから。

オオカミを育てて，客観的に報告したと評価されている記録では，オオカミは人間との関係を結べば，自分と同じ種ではないにしても，お客さま的な「身内」として人間を遇しつづけるようである。人間とのかたい「刷り込み」的絆が結ばれれば，忠実な仲間になるようだ。その点もキプリングは描いている（もちろん，フィクションのところは多々あるが）。

〝群れ社会〟の生態

オオカミは知能的である。たとえば実験的な個体群の観察によってみても，オオカミの群れ内では個体性が確立し，個体どうしで交渉が行なわれているようである。そして，決して人間的なモラルによるのではないが，群れ内での特定の雌と雄との結びつきはわりあいにかたく，「好み」（といえるかどうかは別として）を持つかのように，他の異性をふつうの状況では拒んでいる。オオカミの群れ（それは同一系統のものらしいのだが）内では，子は他の雌からはもちろん雄からも世話を受ける。若い個体でさえ，子に吐きもどしを与えている。子は成獣の吻をくわえるようにする「ものごい」行動をし，それが成獣に吐きもどしをするサイン刺激となるらしい。

人間の子にも，いったん群れの一員となれば，それは行なわれるのだろうか。

オオカミの研究者であるメックは，オオカミの子が育っていくプロセスを調べてみると，人間の子がそのなかで生きていくことは，とてもできそうにないと述べている。それは順位を定める戦いなどを考えてであろう。だが，多少強引にいえば，それには少女たちが加わることなく，つねにまだ成長しない乳呑児的存在として，母親に従っていることで避けられるかもしれない。哺乳類では，成育のおそい子の場合，長く親が連れそっているケースも知られている。

オオカミには，尾を振ったり，顔の表情による「あいさつ行動」が知られている。従順の姿勢はまだしも，アマラやカマラは，尾のない自分たちをどうしたのだろうか。またかれらには，イヌに似た尿などを用いての嗅覚の信号もある。この点になると，オオカミ少女の可能性は，いきづまってしまうのだ。

ここでも，むりに，発育の遅れた子として存在しつづけたと仮定してみよう。だが，ふつう子オオカミは，1年で成熟する。2，3年ならばともかくも，あまりにも長すぎる養育を，母オオカミに強制できるのだろうか。他の雌が引き続きそれにかわるようなことがあるのだろうか。

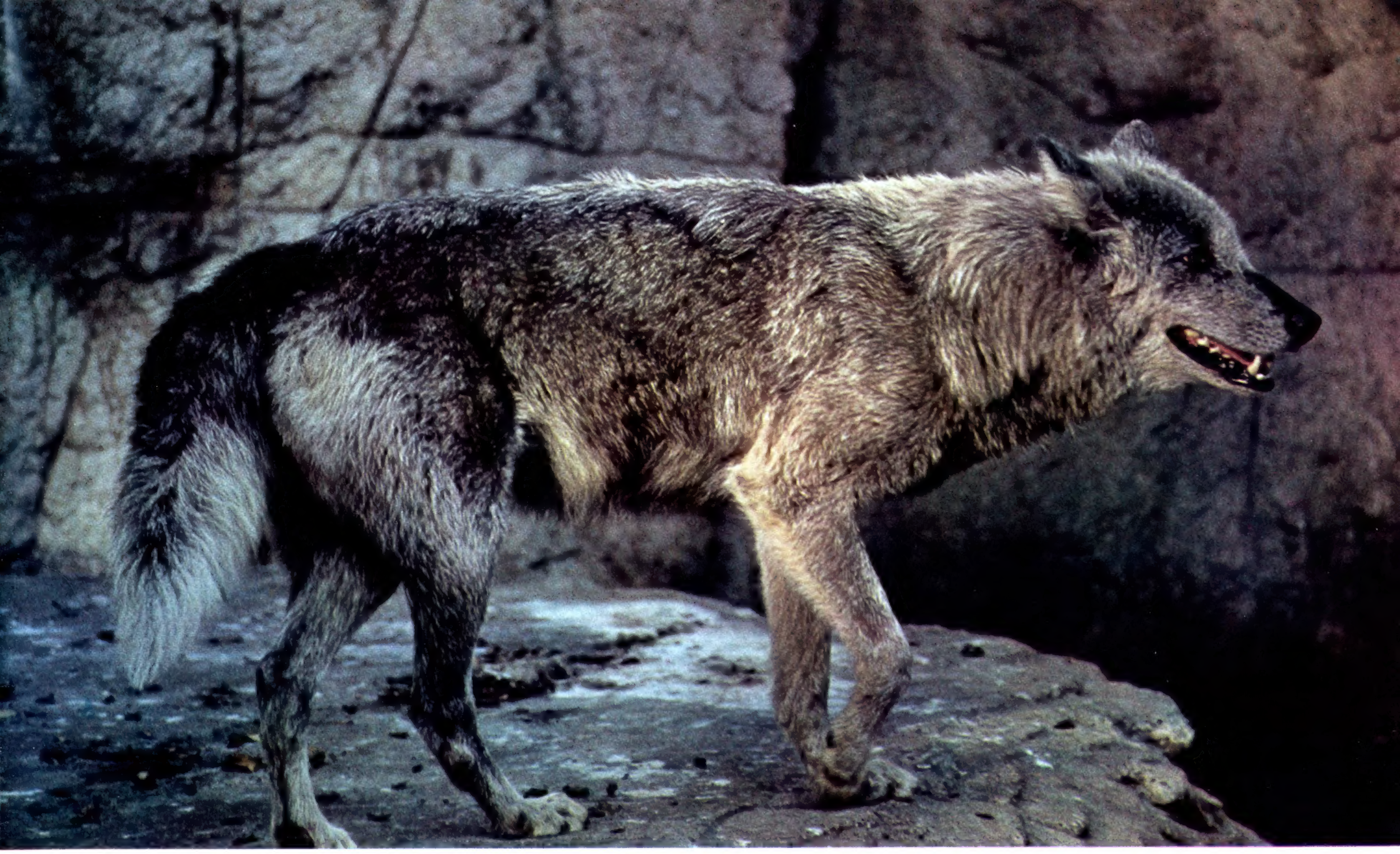
人間界との断絶

仮定の論議は，このあたりでやめるべきであろう。カマラとアマラとは，やはりその存在の可能性を否定するほうが妥当なように思われる。捨てられたヒトの子が，たまたまオオカミの巣穴で発見されたものか，「村」はなんらかの原因でなくなったものなのか，それとも牧師は村人のいうように，ドーソンのごとく不実な人間だったのだろうか。あるいは，シング牧師が，これが事実であることを村人からは隠して，ひそかに胸にいだいて死んでいったのであろうか。すべてこれらは，もはやとらえることのできない過去のものとなってしまった。オオカミ少女にしても，オオカミ少年にしても，いくらかの可能性はまだ残しているとはいうものの——。

オオカミに限らないが，哺乳類の種の世界は，人間とは違った世界であり，それをわれわれはあまりにも知らない。

それはわれわれにとって，彼岸の世界である。その断絶はほとんど埋められないかに見えさえする。かれらを知ろうとして人間の世界に引きこんでしまえば，かれらは「刷り込み」によって人間化された動物となってしまう。子のうちから愛育すればするほど，かれらを非動物化し，人間界のものにしてしまうのだ。われわれは今，それとは別の，観察などを介して彼岸の世界をのぞき見ようとしている。それが成功したときには，この疑問にも1つの曙光を見いだせるのかもしれない。■

（女子栄養大学教授）



オオカミ。イヌ属。
オオカミは肩高約75～80センチ。
四肢が長く，胸が深いために肺活量が大きく
長距離を同じ速さで，獲物を追っていける。(上)
PH. J. SIX

イヌ属　*Canis*

イヌ属には，すでに述べた家犬 *Canis familiaris* のほか，北アメリカ，ユーラシア，アフリカに分布するオオカミ *Canis lupus*，フロリダオオカミ *Canis niger*，ヤマイヌ *Canis hodophilax*，コヨテ *Canis latrans*，キンイロジャッカル *Canis aureus*，セグロジャッカル *Canis mesomelas*，ヨコスジジャッカル *Canis adustus*，エチオピアのシメニアジャッカル *Canis simensis* が含まれる。

これらイヌ属の動物には，イヌ科のなかでもっとも大型の種が含まれ，吻(ふん)は比較的太く，尾は短くてふつうは頭胴長の３分の１くらいしかない。

瞳孔（どうこう）は明るいときでも円形のままで，ネコのように細く針状になることはない。

頭骨は，横から見ると上縁が額のところで高まり，その部分の骨には前頭洞（ぜんとうどう）と呼ばれる空洞がある。上あごの犬歯は太くて比較的短い。

以下にイヌ属のうちオオカミ，インドオオカミ，キンイロジャッカル，ヨコスジジャッカル，セグロジャッカル，コヨテについて述べてみよう。

オオカミ　*Canis lupus*

オオカミはかなり広い範囲に分布していたが，その分布域はしだいに狭くなってきている。現在ではソ連，ポーランド，トルコにかけて，そのほか，数はより少なくなるがフィンランド，スウェーデン，ルーマニア，チェコスロバキアおよびユーゴスラビアにも生息している。イタリアのアペニン山脈やスペインのシエラネバダ山脈の山中には，いくつかのオオカミの群れが残っているといわれる。朝鮮，サハリン，カムチャツカにいたるまでのアジアの地域には，今でもオオカミが多くいるが，北アメリカ北部，とりわけアメリカ合衆国ではだんだんと減少している。オーストラリア，アフリカ，南アメリカにはオオカ



オオカミの分布。
赤い部分はオオカミが生息している地域である。
アカギツネと並んで非常に分布が広い。
しかし，その数はしだいに減っている。









ミは生息していない。

深い胸郭からくる耐久力

オオカミのからだは頭胴長100～140センチ，尾長30～50センチあり，肩高は100センチに達することもあるが，ふつうは75～80センチである。体重は30～80キロほどである。尾はまっすぐのびていて日本犬のように巻いてはいない。走るときには尾を少し上げる。

鼻づらはとがっていて，歯は42本あり，そのうち上下1対の裂肉歯はきわめて強大ではさみのようにかみあう，大きな刃のようになっている。犬歯は極端に長くはないが，あごにしっかりと埋めこまれており，門歯もよく発達している。首は太く，ひとみは人間のそれのようにまるい。耳はとがって立っている。

オオカミのからだは，扁平な尻とイヌにくらべて幅が狭く深さのある胸郭の形が特色となっている。この胸郭のつくりのためにオオカミは深い規則的な呼吸ができ，長い時間を一定の速度で駆けつづけることができるのである〔注1〕。尾のつけ根に近い部分には臭腺（しゅうせん）があり，交尾期にはその分泌（ぶんぴ）が盛んになる。

オオカミの毛は，色，質ともに生活している地方によって異なっている。北方にいるものは毛が密で，腹，首，もものところの毛はとくに濃くなっている。しかし，もっと温暖な地方では，毛はもっと短くてかたい。毛色は黒から白まで，いろいろな段階に変化しているが，もっともふつうにみられる色は，黒がかった灰褐色で，からだの下部では薄い色になっている。夏の間，毛は錆色の光沢を出すが，冬には黄色くなる。

家族単位で群れる

オオカミの巣は，獲物の狩り場に近く，できるだけ見張りにつごうのよいところにつくられている。よく，アナグマやアカギツネのすんでいた巣穴をひろげたり，木の根もとのほらや太い木の根のあいだにすんでいたりする。巣はいくつかあって，危険なときには，雌はいつでも子どもを移動させることができるが，これらの巣はおもな巣穴から５キロくらい離れたところにあることが多い。

１年を通じてオオカミは，だいたいつがい，あるいは子どもを加えた家族単位で生活している。冬には集まってきて群れをつくる。このころには，オオカミの子どもたちも，もう肉を食べることができ，成獣のあとについていけるようになっている。オオカミの遠ぼえが無気味に響くのは，こういった冬のころで，仲間に対して群れをつくろうという呼びかけをしているのである。

群れの生活には順位を決めるための争いや対立もあるが，深刻なものにはならない。群れのなかの，この順位は獲物を合理的に配分するためのもので，非常に重要である。それぞれに，相手をおびやかす地位，決戦をいどむ地位，命令に服従する地位に分かれ，各個体がその群れのなかで占める階級的な地位が決まるのである。

群れをつくったオオカミがシカ，ヘラジカ，ノロなどの群れを襲うときは，そのなかの１頭にねらいをつけて執拗にその個体のみを追う。途中で他の個体にかえるということはない。そして，獲物を追いつめると，合図の叫び声をあげる。オオカミの子は，このようなとき，年長のオオカミのやり方をみていて，のちに少し大きくなると実際に獲物を追いつめる手伝いをするようになるが，最後は経験豊かなオオカミがとどめを刺すのに任せてしまう。

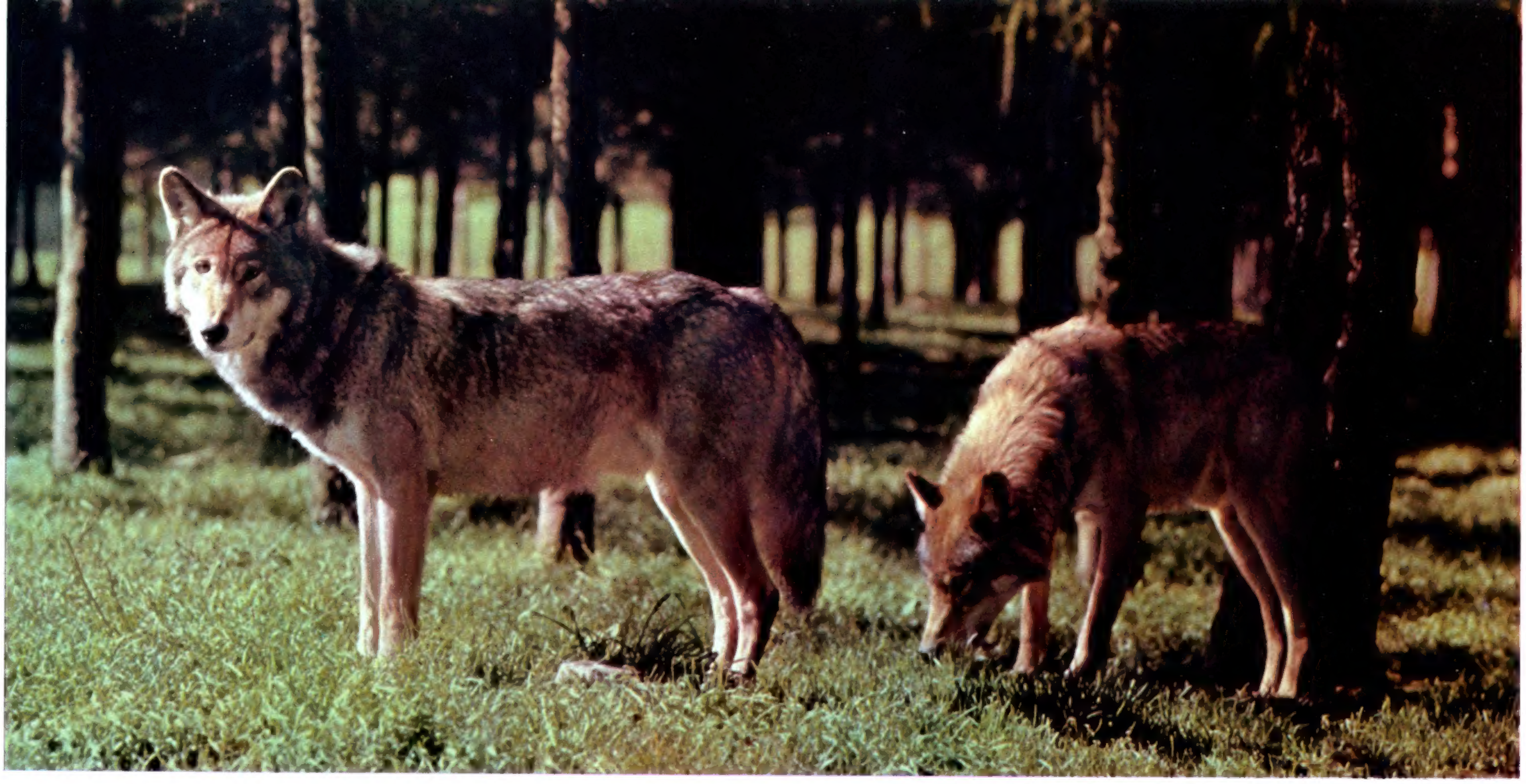
群れは，分離集合の変動はあるが，ほぼつがいの親オオカミが中心となり，それと血縁関係のある子オオカミがその周囲に集まるという家族単位で動く。〔注２〕



オオカミの夫婦は愛情がこまやかで
雌雄協力して子を育てる。（前ページ上左）
交尾期には，雌を得るために雄は争うが
勝敗が決まれば殺しあわない。（前ページ上右）
瞳孔はまるいままで拡大し収縮する。（前ページ下）
PH. W. DISNEY PRODUCTIONS（上2点）PH. R. VAN NOSTRAND（下）

オオカミは
分布が広く，毛の色も質も地方によって異なる。
北方のオオカミは毛が長くふさふさしていて
毛皮の色も一般に明るいものが多い。（上）
PH. W. LUMMER

オオカミは，肉食獣特有の
強大な裂肉歯とがんじょうな犬歯をもつ。
口のいちばん奥に見える上下１対の大きな歯が
裂肉歯で，はさみの刃のように働き
獲物の肉を切る。（下）
PH. W. DISNEY PRODUCTIONS





オオカミの夫婦。右が雌であろう。
2，3歳になると性的に成熟して配偶者を選ぶ。
そのつがいはあまり変わることがない。（上）
PH. W. SUSCHITZKY

冬はオオカミの食糧となる動物が冬眠し
捕えやすい幼獣もいないので
狩りのための行動範囲は非常に広く
直径80キロにもなる。（下）
PH. J.-P. WARIN-JACANA







オオカミに見込まれたら
ほとんど100パーセントにげきれない
オオカミはすばらしい長距離ランナーで
獲物が疲れきるまで追いつづけるからだ（上中）
PH MENTORI

オオカミは泳ぎもじょうずである
雪解けの水はまだちょっと冷たく身を刺して
およぐには少々早いようだが、もうすぐ春。
オオカミの一家にも新しい家族が加わるだろう。
PH L.SIA



長い狩り場の巡回路

オオカミの群れは，それぞれ狩りのための巡回路をもっている。それは，他の動物の通り道であったり，往来の少ない街道であったり，廃道であったりする。けわしい地形のところでは，見通しのよい尾根道を通る。

獲物の多少によって，巡回路の長短が決まる。その長さは100キロにも及び，ところどころに尿でしるしをつけ，丘の上の見晴らしのよいところにはふんがしてある。こういうにおいのするものを巡回路に残していくことは，オオカミどうしのコミュニケーションの重要な手段となっていて，他の群れの個体もよくこの巡回路にやってくる。この道すじをはずれて歩くことはほとんどなく，規則正しい早足で疲れを知らぬかのように1回に25～40キロ，ときには50キロも走りつづける。獲物をとるためのこの巡回路は何世代にもわたって続くので，オオカミの通り道といった意味の地名が外国にはあるという。また，カラスやカササギのような肉食性の鳥は，オオカミの食べ残した骨をついばむべく，この巡回路に集まってくるという。

オオカミは足の速い動物とはいえない。せいぜい速くて時速50キロである。したがって，足の速い獲物は捕えるのがむずかしいが，耐久力があるので，どこまでも同じ速度で追いかけていくことができるため，獲物のほうがしまいに力つきてしまう。水中に逃げても，オオカミは泳ぎがうまいので逃げきれないという。

オオカミの狩りのしかたは持久戦法で，ねらったものをあくまでも追うので，ほとんど失敗がない。こういった狩りの方法は，アフリカのリカオンやインドのドールの狩猟のしかたと同じで，自然界全体からみればオオカミのような動物は，草食動物の群れのうちの老いた個体を犠牲にして群れの血を若くし，草食動物を淘汰するという役目を果たしているのである。また同時に，その地方の生態的均衡を維持させる役目を果たしてもいる。

このことの実例が，アメリカ合衆国はコロラドのグランド・キャニオンの北，カイバブ台地でみられた。1903年には4000頭のミュールジカ *Odocoileus hemionus* がこの台地に生息していたが，かれらを保護するために，1907年から1923年にかけて，この地方のオオカミとピューマを組織的に1頭残らず殺してしまった。1925年にシカは10万頭にふえたが，この地方の植物群を食い荒らし破壊しつくしてしまったため，2年間で1万頭に減ってしまった。40年以上たった今日でも，まだミュールジカの植物破壊のあとが残っている。

オオカミはからだのわりには大食漢で，一度に6キロもの肉を食べることができる。必ずしも新鮮な肉である必要はなく，何日か前の食物でも食べる。機会さえあれば，食べきれないほどの動物を殺してたくわえておく習性があり，よくヒツジがその犠牲になる。

大きい獲物が好きではあるが，齧歯（げっし）類，爬虫（はちゅう）類，鳥類，魚類，水の浅いところにいる両生類や昆虫（こんちゅう）なども食べる。またイヌも食べることがある。番犬が夜の間にはえるひまもなく消えてしまい，朝見ると鎖の先に首輪だけが残っていたということがよくあったという。しかし，オオカミがイヌと協同して他の動物を狩りたし，さしていかみあうこともなくおのおのの分けまえを食べるということもある。

オオカミは1頭またはつがいでいるときは用心深くがまん強くて，するがしこい。子ヒツジをつかいで狩るのに，1頭が人間とイヌ



上：オオカミにじゃれる子オオカミ。生後4～8週間で離乳して，巣穴から出てくる。父親と母親のほかに群れの成獣に育てられて狩りのしかたを習得し成長していく。
PH. J. KLAGES STEHLI

オオカミの巣
巣穴は見晴らしのよい場所につくられるが，カナダヤマアラシなどの巣穴を奪うこともある。ひとつの家族が同じ巣を何年も使いつづけることも珍しくない。
PH. W. DISNEY PRODUCTIONS

の注意をひきつけておき、もう1頭がそのひまに子ヒツジをくわえて走り去る。その耐久力はたいしたもので、わなを引きずって数十kmを走ることもできる。

育ての親は群れの成獣

発情期は12月から2月までである。配偶者のきまっていない雄たちは、雌の獲得をめぐって激しい戦いをするが、殺しあうまでにはいたらない。負けた雄は勝った雄に対し、頭をたれて服従の意を表し、以後ずっと服従しつづける。

2か月ほどの妊娠（にんしん）期間で、春、3～6頭の子を生む。例外的には8～10頭のことがある。子を生む場所は、森林地帯では、茂みや森の奥に、木の枝やかわいた草でつくった巣である。母親はその中に、自分の腹の毛を抜いて敷き、結果的には、乳ぶさがあらわれて子どもが乳を吸いやすくなる。

生まれたばかりのオオカミの子は目を閉じており、10日くらいしてはじめて目が開く。子イヌほどの大きさで、まん丸い目をして厚い柔らかい毛に包まれている。4～8週間ほどで離乳して、親オオカミが半分消化して唾液（だえき）を混ぜた、肉の吐きもどしを食べるようになる。オオカミの自家製離乳食である。それから、親オオカミは生きたえさを子のところにもってきて、殺し方を教える。

このころから子は巣穴を出て親について出歩くようになり、やがて群れに加わるようになるが、この間、群れのなかの親以外のオオカミもよく子オオカミのめんどうをみる。発育は、最初はゆっくりで、のちに急に早くなり、1年たつころにはほぼ成獣の大きさにまでなる。しかし、性的に成熟するのは生後2、3年である。それまでの間は、独立しつつも親の近くで暮らすようである。寿命はほぼイヌと同じ15年くらいである。

オオカミは人間に狩りたてられて、今ではだいぶ数が減っている。ヨーロッパでは、20世紀のはじめまでは中枢（ちゅうすう）神経を麻痺させる毒物のストリキニーネを、肉片や動物の死体のなかに仕込んでオオカミを狩っていた。ソビエトでは、えさのなかに麻酔薬を入れてオオカミを生けどり、世界じゅうの動物園に輸出している。カナダでは、雪の深いときにオオカミが走りにくいのを利用して、輪かんじきをはいて銃でオオカミを狩る。オオカミを保護している国はスウェーデンだけである。フランスでは山林局が、オオカミの群れの生き残りが2、3頭いたのを残しておこうとして、野生の状態においたのだが、1968年に、うち2頭が殺されてしまった。



インドオオカミ

Canis lupus pallipes

インドオオカミはオオカミの亜種である。頭胴長は100センチ以内で肩高はおよそ65センチと、ヨーロッパにいるオオカミにくらべやや小型である。毛の色は多少灰色がかった焦げ茶色であるが、腹のほうは白っぽい。

インド北部の平原、西パキスタン南西部からイラン高原の東縁に及ぶバルチスタン地方、イラン、イラク、アラビアにかけて生息している。茂みの点々とある半ば砂漠状の場所にすみつき、高地や樹木のよく茂った地方にいることは珍しい。インドでは、群れの数は6～8頭ぐらいで、いつもひっそりと静かに通り過ぎていく。

手近にいてとりやすい動物なら、どんな動物でも食べるが、とくにレイヨウ、ヒツジ、ヤギが好きなようである。ウサギ、ネズミ、ウシの類をも襲うし、イヌや人間の子ども、ときにはおとなにとってさえ危険な存在となる。レイヨウの群れを襲うときには音もたてずに近づき、周囲で待ち伏せる。そのうち、1頭のオオカミがレイヨウの前に姿をみせて、からだをねじ曲げたり奇妙な運動をしてみせ、レイヨウの注意を自分のほうにひきつけ、ほかのオオカミが周囲からいっせいにレイヨウにとびかかるのだといわれる。

インドオオカミはときには人間の子どもにも襲いかかる。あるイギリスの狩人は次のように語っている。

WALT DISNEY PRODUCTIONS



PICTSTA



「中央インドのある村での話なのだが、2頭のインドオオカミがいて、何か月も前から村の子どもたちを襲っていた。このオオカミどもの攻撃のしかたはなかなか巧妙で、いつも同じだった。

「まず、2頭のうち弱いほうが村の近くに隠れていて、強いほうが村にはいって子どもにとびかかり、1人をくわえて逃げる。村人はさらわれた子どもを取りもどすのに躍起となり、このオオカミを追っていってしまう。そのすきをねらってもう1頭の隠れていたオオカミがとびだし、あっというまに別の子どもをくわえて走り去るのだ。

「最初にさらわれたほうの子は、なんとか取り返すことができたが、それでも深い傷を負っていることが多かった。しかし、取りもどせたのはしあわせなほうで、あとの1頭に連れ去られた子どもは、決して生きては見つからなかったものだ。

「オオカミの襲撃があまりにうまいので、村人たちは、もうすっかりあきらめて子どもたちが次々と殺されていくのを、指をくわえて見ているよりしかたなかった。

「ちょうどそのころ、わたしがこの村にいったのだ。オオカミのほうは、もうすっかり人間をなめきっていたので平気で村に近づき、ほとんど用心しなくなっていたから、撃ち殺すのは実に簡単だった。村の子どもたちも、以後安心して遊べるようになった」

インドオオカミは、勇敢な動物であるといわれる。イヌに追われても、最初は逃げるがそのうち、急に立ちどまってくるりと後ろを向き、逆に追ってきたイヌどもにとびかかってくるという。キツネの足跡を追っていたイヌの群れを追って、すぐ近くまで追ってきたインドオオカミもあったということである。

オオカミ　イヌ属
かれらはなかなか勇敢である。
えさを横取りされたり巣がおびやかされると
相手がヒグマであっても群れをなして牽制し
ついには追いはらってしまうこともある。
PHOTO: DISNEY PRODUCTIONS

キンイロジャッカル

Canis aureus

キンイロジャッカルは、たんにジャッカルと呼ばれることもある。もっとも大きいもので頭胴長80センチくらい、尾の長さは20～25センチほどで、肩高は50センチを越えることがない。むだのないからだつきで、長い四肢(しし)、とがった鼻づら、間が離れている立った耳などが印象的である。

明るい褐色の目をしているが、ひとみはオオカミのそれのようにまるく収縮する。毛並みはざらざらした感じで、毛の色は灰色がかったものから明るいベージュ色まで変化があるが、いずれも黒い毛が毛並みのなかに点々とはえている。尾の先は黒く、耳の後ろとその近くの後頭部は赤褐色である。

ギリシャ、ブルガリア、ユーゴスラビア、ハンガリー、ポーランド、チェコスロバキアなどの国々の一部から、アフリカ、中近東地方、インド、セイロン島、マレー半島にかけての広い地域に生息している。山岳地帯にも平原にもすみつき、1000メートル以上の高さのところにもいる。

夜行性で、とくに明けがたと夕暮れには活発に活動し、昼間は茂みに隠れた巣穴の中にいる。

野原の清掃係

キンイロジャッカルは1年じゅうをつがいでいることが多い。群れることもあるが、それはおそらく食糧が豊富にあったために、たまたま集まっているだけの話であろう。

小型の哺乳（ほにゅう）類を常食にしているが、昆虫（こんちゅう）や植物、それにうまく飼育場に忍びこめれば家禽を食べる。しばしば、とても大胆になって村や人家の中にまではいってきて、食べ物をさらっていく。

人の住んでいる近くにすみつき、人間のお余りを食べて満足しているのもいる。インドではサトウキビ畑やコーヒー畑を荒らし、アフリカでは栽培している落花生を掘りだして食べてしまう。

しかし、なんといってもキンイロジャッカルは、腐肉を食べるので有名である。自力で草食獣を襲うことができないときは、ハイエナのような大きな動物のあとをついていって、その食べ残した腐肉を食べる。また、海岸沿いに歩いては、死んだ魚や軟体動物を食べるし、平原ではライオンが食べ捨てていった草食獣の残骸や、その他の、ほうっておけば伝染病の原因になるようなあらゆる残骸を取り



中世のヨーロッパでは，オオカミがキツネと並んで狂犬病にかかる率が高く，またオオカミの頭数もかなり多かったので，かまれて狂犬病にかかる人間もけっこういたのである。そのため，各村ごとに特別編成の狩猟隊がつくられたくらいであった。そして，これらの狩人たちがなかなかに高位の狩猟官として遇された時代もあった。夜間，魔法使いがオオカミの姿となって，町や村を徘徊する伝説も生まれた。

PH. T. Mc HUGH







コヨテは，オオカミよりは食性が広く，ウサギ類，鳥類，ネズミ類などを食べるが，冬になって，大地が一面の雪におおわれてしまうと，これらの獲物は，とりにくくなるので，見つかったものはなんでも，たとえば，このような雪のなかに以前から捨てられていた古い骨のようなものまで食べる。

PH. RUSS KINNE



のぞいてくれるので有益な動物である

キンイロジャッカルが他の肉食獣に襲われることもあるのだが，そんなとき，逃げきれないとわかると仮死状態になって難をのがれる

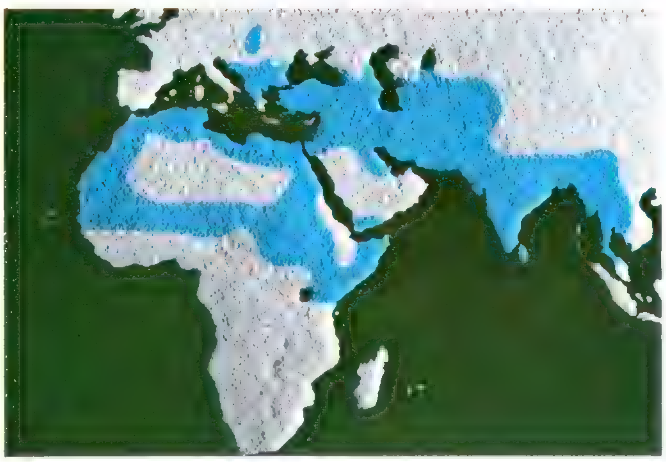
夜，イヌのうなり声に似てはいるが，しかしもっと広い音域をもつ声でほえ，人の眠りを妨げることがある　1頭がほえ始めると，広野のあちこちでほかのキンイロジャッカルも合唱を始め，一大コンサートが開かれるが，これは決して耳にここちよいものではなく，かなりすさまじいものとなって終わる

発情期は1，2月で，雄たちはこの間，ふだんよりも強くほえる　受胎は，必ずしも最初の交尾と一致するとはかぎらないので，正確な妊娠（にんしん）期間はわかっていないが，だいたいのところ，57～67日間とみられている　子は1産に2～7頭が，母親が自力で掘った巣穴の中か，他の動物の巣穴を簡単に修理した巣穴の中に生みおとされる

親は，6か月たつと子どもたちを連れだして狩りのしかたを教えるようになり，8か月もすると子どもたちは自力で獲物をとり，親から離れて生きていけるまでに成長する　しかし，キンイロジャッカルが性的に成熟するまでには，約2年かかり，イヌとほぼ同じくらい生きる

セグロジャッカルは
こんな骨と皮ばかりの獲物の残骸でも食べる。
ほかの動物が食いちらしたものをかたづけるので
清掃屋のあだ名があるが，上には上がいるもの
ハゲワシが順番を待っている。（36―10，11
PH PICOU-FOTOGRAM

キンイロジャッカルは
ハイエナと食べるものが一致するので
ときどき同じ獲物をめぐっていさかいを起こす
しかし，ハイエナのほうが力は強いので
キンイロジャッカルはお余りに甘んじる（上
PH N. LIGHTFOOT



キンイロジャッカルの分布
西はアフリカから東は東南アジアまで
広く分布している









[illegible]は
[illegible]暮ら[illegible]
[illegible]やけ暮れどきになると
[illegible]って狩りに[illegible]かける。[illegible]上
PH. DRAGESCO/ATLAS PHOTO

[illegible]は
[illegible]きくてたがいに離れた耳と細くとがった口が特徴
[illegible]の色は[illegible]色から[illegible]までの変化があり
腹の毛はほとんど白く、尾の先は黒い。[illegible]左
PH. L. SIRMAN



ヨコスジジャッカル

Canis adustus

ヨコスジジャッカルはキンイロジャッカルとくらべると、耳が短く、鼻づらが長く、歯が小さい。

とくにキンイロジャッカルと異なるのは毛並みで、耳より後ろの体表面は灰色をしており、左右の横腹にはほぼ脊椎（せきつい）と平行に黒い線が1本ずつ通っている。白い毛にふちどられたこの黒い帯状の線は、毛が抜けかわるときにはぼかしたようになる。尾は黒くて先だけが白い。頭胴長は65～81センチ、尾長34～41センチ、肩高38センチほどである。

ヨコスジジャッカルは、アフリカだけに生息している種である。昼の暑い間は日を避けて休んでいるが、日暮れどきになるとサバンナを1頭で、あるいはつがいでえさを求めて走りまわる。群れをつくって大きな獲物を襲うことはほとんどない。小さな獲物や死んだ動物の肉を好み、とくにアブラヤシの実が大好物である。

人間の残飯にありつこうとして、人家の近くにまで現われることもしばしばあるが、人が気づいて追いはらい始めると、のらイヌのように一応は逃げるが遠くまでは逃げず、一定の距離をおいて立ちどまり、興味深げに次に何が起こるのかをじっと見守っている。人間にとって、オオカミほどに危険性のある動物ではないが、その嘆くようなほえ声は眠っている人たちを不安にする。

小さいときから育てれば、よく人になれて食性も広くなり、肉のほかにも魚、野菜、パンなどを喜んで食べるようになる。気質はとても穏やかで、動作はイヌに似ているが、野

キンイロジャッカルの子ら
緊張して、においをかぎながら[illegible]ている。こうして[illegible]に食物のあり場所をかぎつけて[illegible]
[illegible]
[illegible] PHOTO

キンイロジャッカル　イヌ属
食後に飲む清い水の味[illegible]ている[illegible]！
人に飼われ、一生を保護されて暮らすのもよいが
この自然の[illegible]味は何にも代えがたい[illegible]
[illegible]





生の状態では夜行性なので、その癖が残っているせいか昼の間は姿をみせない。食事どきに現われて、イヌのように主人の足に鼻先をすりよせ、甘えてごちそうをねだる。

セグロジャッカル

Canis mesomelas

セグロジャッカルは、体長62～81センチ、尾長26～36センチほど、肩高は40センチ前後である。大きなとがって立った耳は、10～13センチの長さがある。毛並みは赤褐色で、からだの背面部には黒い鞍を置いたような毛がはえている。尾の先には黒い毛のふさがある。

アフリカ東部のケニア、ウガンダのあたりおよびアフリカ南部一帯のサバンナ地帯に生息している。

セグロジャッカルは、つがいかつがい中心の家族的な小さな群れをつくって暮らしている。夜行性で、昼間は茂みや巣穴にひそんでいる。食性は雑食性で、ライオンなどの獲物の余りをかたづけて歩き、鳥や鳥の卵や昆虫（こんちゅう）、トカゲ、植物質のものなどを食べる。また、レイヨウを狩るために、群れをつくって力を合わせる。ときには家禽や家畜を襲って人間に目のかたきにされる。

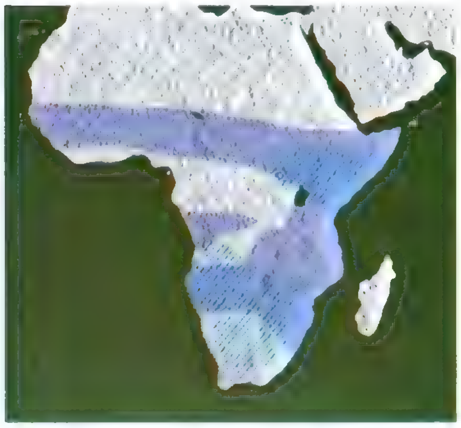
子は南アフリカでは11～12月ごろに1産に2～7頭が巣穴の中で生まれるが、北半球のロンドン動物園では3，4月ごろに生まれた記録がある。育児は父親と母親が協力して行なう。離乳期には、親が一度食べて半分ほど消化したものを吐きもどして子に与える。

コヨテ　*Canis latrans*

コヨテはイヌ属に属する肉食獣で、19の亜種にわけられることが多い。そのうち、代表的な亜種はアメリカ合衆国の中央部に分布するネブラスカコヨテ *Canis latrans latrans*、アラスカに生息するアラスカコヨテ *Canis latrans incolatus*、テキサスにすむテキサスコヨテ *Canis latrans texensis* などである。

コヨテは頭胴長およそ100センチ、尾長45センチ以上はあり，肩高55センチほどである。重さは10～15キロで、一見したところではオオカミに似ている。鼻づらはややとがっており、犬歯はオオカミにくらべると長いが、オオカミほどがんじょうではない。第2前臼歯（きゅうし）と第3前臼歯の間はオオカミのより広いすきまがあいている。耳は大きくて立っており、よく動く。

毛の色は、オオカミほど多様ではないが、



ヨコスジジャッカルとセグロジャッカルの分布
緑の部分はヨコスジジャッカルの生息地。
青い斜線の部分はセグロジャッカルの生息地。
ともにアフリカにのみすむ

ヨコスジジャッカル　イヌ属
横腹を走る白く縁どられた黒いすじが命名の由来。
キンイロジャッカルにくらべ耳はずっと短いが
からだはほぼ同じか少し小さいくらい（上左）
PH. J. L. S. DUBOIS



セグロジャッカル　イヌ属
ようやく見つけた骨をかじっているのだが
はやくも見つけたハゲワシが控えていて
ときどき待ちきれなくなって横取りしようとする。
うるさいなあ，ぼくが先に見つけたのに！（中上，下）
PH. EDISTUDIO ; PH. S. BROOKS









セグロジャッカル。
なにかいいものないかなあ……よし
あっ、あったぞ。ライオン一家がシマウマのうち
こんなに残していった。子どもにはきもどして
あたえる分も胃に収め、早く巣に帰らなきゃ。
PH: H. LANKS/HOLMES-LEBEL　PH: F. VEZI



灰色から淡黄褐色までの変化がある。高地にいるコヨテには灰色や暗い色のものが多く，平原や砂漠にすむコヨテには淡黄褐色や明るい色のものがよくみられるようだ。年に1度，初夏から晩秋にかけて，毛が抜けかわる。

オオカミやアカギツネと同じく，コヨテにも尾の根もとに臭腺（しゅうせん）があるが，オオカミのものよりは小さい。臭腺の辺の毛の色は，他の部分の毛にくらべて黒ずんでいる。各個体ごとに臭腺から分泌（ぶんぴ）される分泌物のにおいが異なるので，コヨテどうしがたがいに個体を見分けるときに，この臭腺のもつ役割は重要である。

ひろがった分布域

コヨテは北アメリカのアラスカ，カナダ，アメリカ合衆国から中央アメリカにかけて広く分布している。

20年このかた，コヨテの分布域は北のほうへ，すなわちカナダの方面へひろがっていった。以前，この方面にはコヨテが分布していなかったのである。コヨテの分布域が北のほうへひろがっていったとき，オオカミの生息地にくいこんでいったはずであるが，そのためにオオカミの分布域がいくらか後退したのか，あるいは別段変わりもしなかったのか，そのあたりは明確ではない。

ただひとつ確かなことは，コヨテの分布域の拡大が草食獣であるバイソンの退行現象と一致していることである。バイソンは，今ほど数が少なくなかったころには，オオカミの一般的な食糧であったから，バイソンの退行とともにオオカミの分布も縮小し，それと逆比例してオオカミよりも食性の広いコヨテの分布域がひろがったのだと考えることもできる。

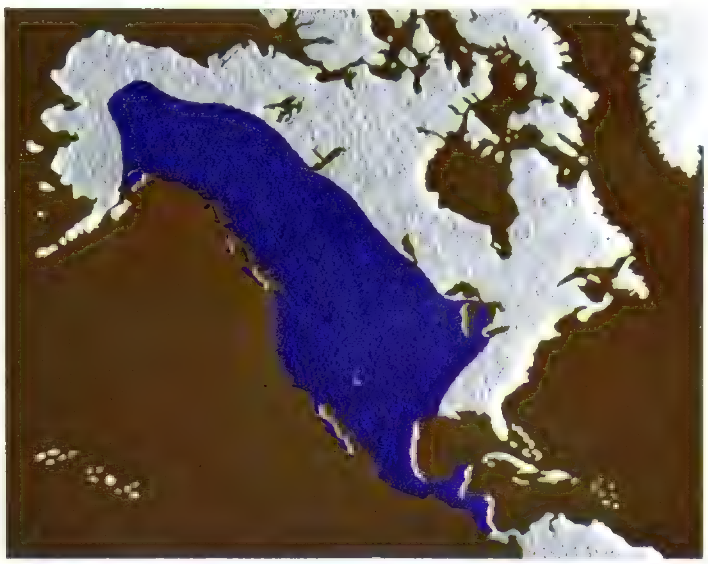
コヨテが南のほう，中央アメリカにまで分布をひろげてきたのは，中央アメリカにスペイン兵がはいってきたころ，すなわち16世紀ごろである。スペイン人とともにウシやヤギなどの家畜がこの地域に連れてこられたため，コヨテの食糧が豊富になったことがその一因ともみられる。

野面をわたるコーラス

コヨテの食物は齧歯（げっし）類が多く，腐肉やトカゲ類，両生類も食べる。また，食糧が不足すると共食いをすることもある。

子を養っているときは，ヒツジなどの家畜を襲う率が多い。獲物が一度に食べきれないと，残りを地に埋めて尿でしるしをつけておき，あとでもどってきて食べる。

群れをなして獲物を追いつめ，後ろから襲いかかるオオカミとは違って，コヨテはつがい，あるいは単独で狩りをするのがふつうであるが，ときには何頭かが次々と引きついで獲物を追っていき，追いつめると正面から獲



コヨテの分布。
北アメリカのアラスカから
中央アメリカにまで及ぶ。



コヨテ。イヌ属。
コヨテのコーラスは日暮れどき
天に向かって遠く長く響く。
荒野のあちこちから
仲間の声がこたえて盛りあがっていく。（上右）
PH. OKAPIA



コヨテに高所恐怖症はないのだろうか。
この高台もコヨテの毎日の巡回路にはいっていて
天下の形勢をみながらその辺の岩に尿をかけて
においをかぎまわり，きょうの獲物の多寡を測る。
PH.E. A. HEINIGER

36－19





物の頭やのどにかみつき，コヨテ独特の長い犬歯で深い裂傷を与える。オオカミより足が速く，ふつうは時速50キロくらいだが，最高時速65キロくらいで30分以上も走りつづけることができる。泳ぎもうまくて数キロくらいは泳いでいくし，かなり耐久力はある。

オオカミと同じく，狩りのための巡回路をもっていて規則的に歩きまわるが，ときにこの巡回路は10キロ以上にもなることがある。食糧がじゅうぶんで自分の生活がかき乱されなければ，非常に珍しい場合ではあるが一生の間，同じ巡回路を回っている。尾をだらんとたらしたまま小走りに巡り，途中きまった場所に尿をかけては，そのにおいが消えないうちにまた回ってきてにおいのしるしをつけなおしておく。

コヨテを有名にしているものにそのコーラスがある。コヨテの学名のうち *latrans* はほえるものを意味するラテン語だが，今もむかしもコヨテのこの習性は変わっていない。日暮れどきになると草原のあちこちでコヨテの遠ぼえが始まり，やがて一大コーラスとなる。コヨテが，なぜこの時刻にこのようなコーラスをするのか，その意味は残念ながらまだよくわかっていない。

オオカミよりは無貞操

コヨテはふつう一夫一婦であるが，そのつがいは数年しか続かず，オオカミのようにはほとんど一生をともに過ごすということはない。それどころか，1つの巣穴の中に大きさが異なり，生まれた日が少し異なるらしい2組の子がはいっていることさえたまにあるので，一夫多妻もあると考えられる。

繁殖期は春で，63日前後の妊娠（にんしん）期間を経て，5～7頭ほど生まれる。巣穴はしばしばアメリカアナグマやスカンク，カナダヤマアラシなどの巣を，母親がひろげて改良したもので，いくつもの出口があり，周辺はつねにとても清潔になっている。何年も同じ巣穴を使い，その巣穴がこわれても次の年にはちゃんと直して使っている。

雌のコヨテは乳頭が5対あり，1か月ほどは授乳するが，その後は一度食べたものを吐きもどして子どもの口に入れてやる方法で育てていく。雄のコヨテは育児期間中，雌と子のために食物を運ぶが，巣穴の中にははいらないという。親コヨテがいちばん動物を殺すのは，子を育てる期間中である。

8週間から10週間たつと子どもたちは巣穴から出てくるが，その毛並みはまだ親コヨテには及ばない。子どもたちの毛並みがようやく親のそれに似てきて，頭蓋（ずがい）骨が完全に縫合（ほうごう）するまでには6か月りかかる。生後2年ほどで性的に成熟し，10年から18年ほど生きる。

小さいときに捕えて育てれば人によくなれるし，よく知っている人に対しては，おとなしく，すなおである。頭をなでられるのは好きなようだが，イヌのように，差しだされた手をなめるようなことはない。



コヨテの巣と子
巣穴はアナグマの巣などを改良して何年も使う
子が巣穴から出てくるのは2か月後である（上左）
PHOT. R. SIMON OSTMAN

コヨテの子は
目を閉じて生まれ，1か月ほどを穴で生きる
やがて耳もコヨテらしくピンと三角に立ち
親の吐きもどしたえさを食べるようになるだろう。
しかし，この兄弟の何頭が生き残れることか（下）
PHOT. SIMON PHOTO RESEARCHERS

コヨテ
キツネに似るが，耳はより長く
鼻づらもよりとがっている（上右）
PHOT. P. LARIN JICANE

日本のオオカミ

今泉吉典

日本には２種類のオオカミ類、すなわち、エゾオオカミ *Canis lupus hattai* とヤマイヌ *Canis hodophilax* がいたが、残念なことにどちらも明治年間に絶えてしまった。

エゾオオカミ

エゾオオカミは北海道に生息していた、頭骨の基底全長が24.5センチもある、巨大なオオカミの一亜種である。この亜種の頭骨標本は大英博物館に１個あるだけで、本場の日本には破片すら残っていない。明治になって北海道の開拓が始まったころには、たくさんいて、ウシやウマを襲い、大きな害を及ぼしたというのに、1900年前後にはまったく姿を消してしまった。まことに不思議なことである。

北海道大学農学部には、雌雄２頭のエゾオオカミの剝製標本があるが、そのなかにはいっている頭骨はエゾオオカミのものでないかもしれない。というのは、そのころの剝製師は、本物の頭骨は別にとっておいて、剝製のなかに入れる骨は代用品を使うことがあったので、必ずしもエゾオオカミの剝製のなかにはいっている頭骨がエゾオオカミのものであるとはかぎらないからである

北大には、オオカミの剝製がもう１体あるが、犬類研究家の故斉藤弘吉氏によると、残念ながらエゾオオカミではないらしい。

大英博物館のエゾオオカミは、そこに所蔵されている多数のユーラシア、北アメリカ産のオオカミとくらべて、もっとも大きく、実にみごとな頭骨である。大型哺乳類研究の権威であるポコック R. I. Pocock がすでに学名がつけられているのを知らずに、 *Canis lupus rex*（王者の意）と名づけたのもなるほどとうなずける。北アメリカには、これよりも大きなオオカミがいることがまれではないが、少なくともユーラシアでは最大級の頭骨である。しかし、この個体だけでエゾオオカミがユーラシア最大の亜種であるときめつけることはできない。

大英博物館に所蔵されているエゾオオカミの頭骨は、額が鼻根部から急に高まっている典型的なオオカミのそれである。イギリスの研究者のなかには、サハリンに生息するオオカミも同じ亜種だと考えているものがあるが、もしそうだとすれば、エゾオオカミという亜種は、幸いにもまだ絶滅していないことになる。

ヤマイヌ

本州、四国、九州に生息したヤマイヌは、オオカミの小型の亜種というのが世界の通説になって以来、ホンドオオカミとかニホンオオカミと呼ばれるようになった。だが、これは狭義のオオカミ、すなわち *Canis lupus* に含まれるものではなく、別の種だと思われるので、古い和名を生かしてヤマイヌと呼ぶことにする。

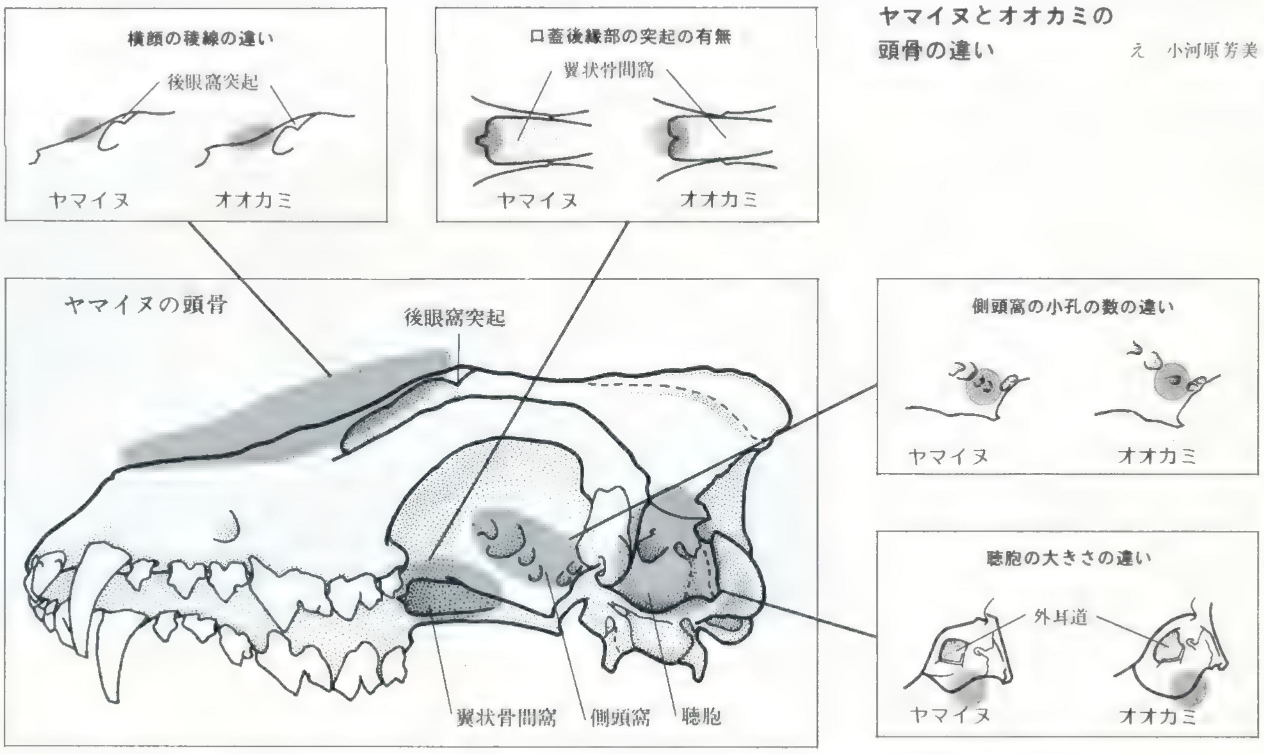
エゾオオカミと同じように、ヤマイヌも、1905年に奈良県鷲家口で捕えられた若い雄を最後に、どうやら絶えてしまったようだが、幸いにも標本はかなりたくさん残っている。オランダのライデンにある王立博物館には、シーボルトが日本で採集した、かなりみごとなヤマイヌの剝製標本が１体と、頭骨が２点所蔵されているし、大英博物館には前記の奈良県産のヤマイヌの仮剝製とその頭骨がある。国内では、国立科学博物館に福島県産の剝製標本と、その全身骨格が１点、および頭骨が２点あるほか、東京大学と和歌山大学に剝製標本があり、頭骨も個人所有のものを含めて、少なくとも10数点は残っているらしい。これだけあれば、どうにかヤマイヌの本態をつかむこともできよう。不幸中の幸いというべきであろう。

ヤマイヌの分類上の位置

ヤマイヌは分類学的にみて、不思議な動物である。

現生のイヌ科は、古くから３つの亜科に分類されてきた。１つはオトキオンだけが含まれているオトキオン亜科、もう１つはヤブイヌ、ドール、リカオンの３種が含まれるシモキオン亜科、最後が残りのイヌ科動物のすべて、すなわち、オオカミ、イヌからキツネ、タヌキまでが含まれるイヌ亜科である。

——→ ＊



ヤマイヌとオオカミの頭骨の違い　え　小河原芳美

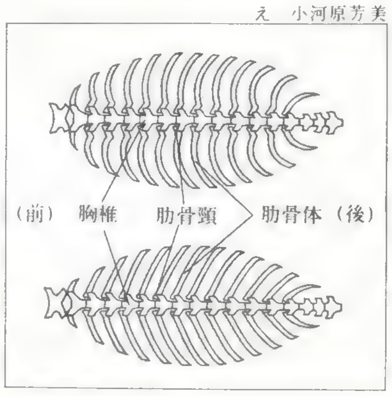
カラーページ注

〔注１〕 **オオカミの胸郭**　オオカミの胸郭はイヌのそれよりも幅が狭く、深い（上下の高さが高い）といわれている。この点ではヤマイヌもオオカミに等しいので、イヌとヤマイヌをくらべてみよう。

ヤマイヌの胸郭が深いのは肋骨が比較的長いためで、幅が狭いのは肋骨が後ろにねているためである。イヌでは肋骨の上部の、胸椎と関節する部分（肋骨頸）が前に折れ曲がっていて、そのため肋骨体と呼ばれる肋骨の主部がふだんから立っているが、ヤマイヌでは肋骨頸の曲がりがほとんどなく、肋骨の主部は後ろにねているのである。ヤマイヌの胸郭は幅は狭いが、深さがあるため、その容積はイヌと大差がない。

一般に深い呼吸をするには、胸郭の容積を大きくする必要があるが、そのようなときには肋骨を立てるのがふつうである。したがって、ふだんから肋骨が立っているイヌよりも、ふだんは肋骨が後ろにねているヤマイヌのほうが、いっそう胸郭の容積を大きくできる。

イヌ(上)とヤマイヌ(下)の胸郭
—真上から見たところ—
え　小河原芳美



ヤマイヌやオオカミのほうがイヌよりもずっと深い呼吸をするのに適しているということができよう。

〔注２〕 **オオカミの群れ**　オオカミは家族群で生活する。それは１対の成熟した雌雄、その年に生まれた子ども、それに前の年に生まれた子どもからなる家族で、ふつうは10頭前後が一団となっている。この家族群は一定のなわ張りをもち、群れの各員は絶えずなわ張り内をパトロールして、他のオオカミの侵入を防いでいる。

しかし、ツンドラ地帯では、秋になってトナカイの大群が移動を開始すると、２つまたは３つのオオカミの家族群が集まってきて、20頭以上、ときには36頭もの大きな群れになる。オオカミはこのような大きな群れでトナカイを襲うのである。これはもちろん、大型の獲物を襲うための便宜によるのであろうが、同時に、これによって独身の若い個体が配偶者を選ぶチャンスが得られることも重要である。

オオカミの夫婦は、ほとんどが、たがいに一生を連れそうと考えられている。

■　（今泉吉典）



雨と霧にぬれながら
どんべえは草むらを遊びまわる

ヒグマと2人のイノシシ 34

雨と霧の隅で

畑　正憲

島に本格的な春がやってきたのは，6月に入ってからだった。霧と雨の土地には太陽がめったに顔を出さず，北海道の南側と比べ，花や蝶が眠りについている時間が長い。

その意味では，暗く陰気な土地である。ハイビスカスが1年中咲き乱れる南の島の明るさはここにはない。

特に今年は，早くも冷害が噂されていた。20年ぶりの異常だという。牧草でさえ，第1期の刈込みが出来そうもないというニュースが伝わってきた。

そう言えば，例年6月の中旬には満開になるというスズランが，やっと芽を出したばかりだ。この調子では7月に入っても，日当たりの悪い場所ではスズランの花が見られるだろう。

霧の日が多い。雨の日が多い。

そして，霧とも雨ともつかぬ日もかなりある。濃い乳白色のとばりが天と地をとざし，家族だけで家の前に坐っていると，どこか他の天体，火星か木星のとある渚にいるような気がしてきた。

奇怪な断続音，けたたましい叫び声はカモメのラブコール。つい近くで鳴くその姿が見えず，恋の歌が天空にこだまする時だけ，足先の潮騒がふっと聞こえなくなった。

原色とりどりの花ときらめく太陽，目にしみるサンゴ砂もよかろう。それに憧れ，南へ南へと旅した時代もあった。現に昨年は沖縄のはずれで気もそぞろ，日の光がときどき金色の縞目模様を作る青い海底で，一生ここに住めたらなどと考えたりしていた。

だが，霧の国もいい。今，僕は動物界に不時着し，そこからメッセージを送り続けている気がしている。思いのたけを綴った紙切れを小瓶につめ，ドボンと眼前の波に投じて。

どんべえも海と霧の子である。大昔ならいざ知らず，浜で育てられたヒグマは珍しいのではなかろうか。

いくら何でも，メスにどんべえという名前はひど過ぎると非難され，家庭裁判所に改名届を出そうと考えたこともある。霧子とか海子とか，この島にちなんだ名にしようと思った。

だが，両者とも字面はいいが，弱々しくってヒグマ向きではない。それかと言って英語にすれば，Sea子になり，おしっこみたいでけったくそが悪い。やはりどんべえはどんべえである。たとえメスであろうとも，手ごわい，男性的な動物である。日が経つにつれ家族の全員が，どんべえという名の素晴らしさを認めてくれた。

霧の深い日，どんべえの体毛には雨ともつかぬ水分が凝結し，先端で清らかな宝石になった。口のまわりにある3センチほどのまばらなひげ，目の上にピンと張った毛，目のまわりのまつげと思しい毛……そのすべてが白銀の飾りをつけた。



霧笛の音も吸い込まれるような，暗い霧に包まれた日が続く

カラーページ解説

＊ ――――→

最近は第四紀洪積世の哺乳類化石の研究が急速に進んできたが，それによると，シモキオン亜科のうち少なくともドールとリカオンは，洪積世のはじめにイヌ亜科のイヌ属から分かれたもので，亜科の特徴とされる，歯の数が減ったり，臼歯の構造が違ってきたのはごく新しいできごとだという。

もし，このような説が正しいとするならば，ヤマイヌこそ，シモキオン亜科がイヌ亜科のイヌ属から分かれる，その分岐点にもっとも近いところに位置する古い種なのではなかろうか。

というのは，イヌ亜科の動物では，頭骨の側下部に，太い神経や血管の通る大きな孔が，正常なものでは5個開いているが，シモキオン亜科では大多数のものが，この孔を6個もっている。

ところが不思議なことに，ヤマイヌでは，5個のものと6個のものがほぼ半々か，むしろ6個のものが多く，少なくともこの点では，シモキオン亜科に近づいているのである。

またヤマイヌはイヌ亜科イヌ属のオオカミと違って，額が鼻根部から急に高まることがないし，同じくイヌ属のコヨテ，オオカミ，ジャッカル，イヌなどでは，口蓋の後縁に突出した部分があるのだが，ヤマイヌではその部分がくぼんでいるなど，イヌ亜科イヌ属の動物とも相違するところが多いのである。

以上，ヤマイヌについてのなぞは多いが，イヌ科の系統を研究するうえに欠くことのできない貴重な種類のようである。

日本犬とヤマイヌ

日本犬の祖先はヤマイヌであるとか，日本犬にはヤマイヌの血が混ざっているという説が，今なおかなり有力である。

なるほど，ヤマイヌはオオカミよりずっと小型で，頭骨の基底全長が17.4〜20.6センチほどであるから，中型から大型の日本犬に大きさがよく似ている。しかし，日本犬にヤマイヌの血が混ざっているような形跡は，少なくとも骨格にはまったく見いだすことができない。

日本犬はヤマイヌにくらべて，額がずっと高く，吻や胴が短く，胸の幅が広いために，前肢の左右の肩の関節は間が広く開いている。オオカミやヤマイヌでは，この関節は左右がたがいに接近していて，これがイヌとは違った，オオカミらしい足つきをさせているのである。

また，ヤマイヌとオオカミでは，四肢の指のうち，中央の2本の指が側方の指よりもずっと長いが，日本犬ではその差があまり顕著でない。ヤマイヌやオオカミの足跡は長い楕円形なのに，日本犬がほとんど円形なのは，このためである。

日本犬とヤマイヌの違いは，このほかにもたくさんある。骨格をくらべてみれば，その違いのあまりにも顕著なのに驚くばかりで，これら両種が近縁だなどとはとても考えられるものではない。

ヤマイヌは滅んだのではない，日本犬と交配して合体してしまったのだ，という説もある。ヤマイヌの絶滅を悼む人たちには残酷のようだが，そのような可能性はほとんどない，というのがわたしの考えである。■

気温が低いので，吐く息が白く見える。渚をたっぷり走った後のどんべえは，四肢を投げ出し，切なそうにあえぐ。その度に，たくましい口からめらめらと湯気が立つ。

そういう霧の日のどんべえには，稚い表情はみじんもなかった。精悍で，豪気で，ふてぶてしく，何ものも怖れぬ野獣そのものだった。

かすかな気配に耳が動く。背の毛が敏感に反応する。それらは日によっては，保守的で臆病な野性の表われとも受け取れた。しかし霧の日には，攻撃の前の雄々しい反応だと感じられる。

——どんべえよ。

と，僕は心の中で問いかけた。

——お前とおれはこうして結ばれ，こんなにも近々とみつめ合っている。……でも，何故，こうして一緒に生きていかねばならないのだ。

僕には明日がわからぬ。来年の今頃どうしているか全然見当がつかぬ。

持病もろとも消化され，糞になり下がっている可能性もある。秋には建設する新しい住居で平和に暮らしていれば，彼女は三まわりも四まわりも大きくなっていることだろう。

そもそも僕の人生そのものが，見通しがきかぬものだった。明日がどうなのか自分にもわからぬ小さな放浪者だった。ちょうどこの深い霧と同じように。

霧は奇妙だ。島と海を包んでこれだけ深いのに，自分のまわりだけは呆れるほど鮮明である。煙草についた小さな水滴のしみが，煙草が短くなるに従ってすうっと消えてゆくのが克明にわかる。ほら……どんべえの耳の毛についた水滴が，根元へ向かって流れ，途中で，千々に砕けた。

——これが人生なのか。霧にとざされた一場の夢。それでいいじゃないか，と僕は思う。死ぬまでの明確な設計図なんて，引けやしないだろう。

僕の母方の祖父は，かたい商売として質屋を選んでいた。質草を受け出されようと流されようと，どっちに転んでも損はないと自慢していたが，ある日小石にけつまずいて転び，頭を強打して死んでしまった。転び方だって，三通りや四通りでないのが人生である。

それにしても，ここへ移り住んで，僕は涙もろくなった。稚い動物が手に入り，すくすくと育っていくところを見ると，涙がにじんでならぬ。

家族，いやそれぞれ肩書きのついた隊長たちは，「歳をとったなあ。そろそろ引退式の準備だな」

と笑う。

また，もう1人のイノシシは，

「気をつけて下さいよ。どんべえに食われる覚悟なんてしちゃ厭ですよ」

と心配気である。

読者よ，安心召されよ，僕はなかなか死なぬ。危険の度合がわからぬ臆病者ではないつもりだ。まだまだのさばって，書きとめて置きたいことが山ほどある。

でも，自分のこの変化はどうだろうか。そぼ降る霧がからだにしみこんで，涙腺から分泌しているのだろうか。

なに，それほど複雑なことではあるまい。ねえ，どんべえちゃん，いい子だねえ……それと同じことであろう。クマと暮らすことで，僕自身が変質し始めているのである。頭脳のつくりはもともと複雑な方ではなかったが，日を追って短期間にクマ的になってゆく。人と利害のからんだ話をするのがおっくうになり，自分の感情の動きが人間離れしてきたのがよくわかる。ここしばらくは，人に対する好悪の情が激しくなりそうだ。

霧はますます濃く，風が呼吸をやめた時，霧笛が霧のすきまから忍び寄ってきた。霧を運ぶ風は灯台へと向かい，あのものさびしい調べを途中で押し戻すことの方が多いのである。

一休みしたどんべえが，また渚を走り始めた。

一頃に比べると，ギャロップも堂々としてきた。前足で大地を叩きつけ，力強く後ろに掻く。その度に背の筋肉がもくりもくりと動く。

僕は叫ぶ。

「とまれ！」

それからぐっと足を踏ん張った。

「とまれ，とまれ，とまれっ！」

鎖が張る。

と同時に，どんべえのからだが首輪の向こうへ放り投げられる形になり，頭だけがねじくれてこちらに残った。

すると——

「ワ。ア，ア，ア，ア……」

どんべえは反抗的に口を開閉させ，何が自分をとめたのかわからずに，気狂いじみた激昂を示して自分の足に咬みついた。その痛みでますます興奮し，前足を振っているうちに鎖にからみ，渾身の力をこめて鎖にかじりつくのだった。

一体これで，平和に散歩出来るようになるのだろうか。■

夜空の動物たち　3

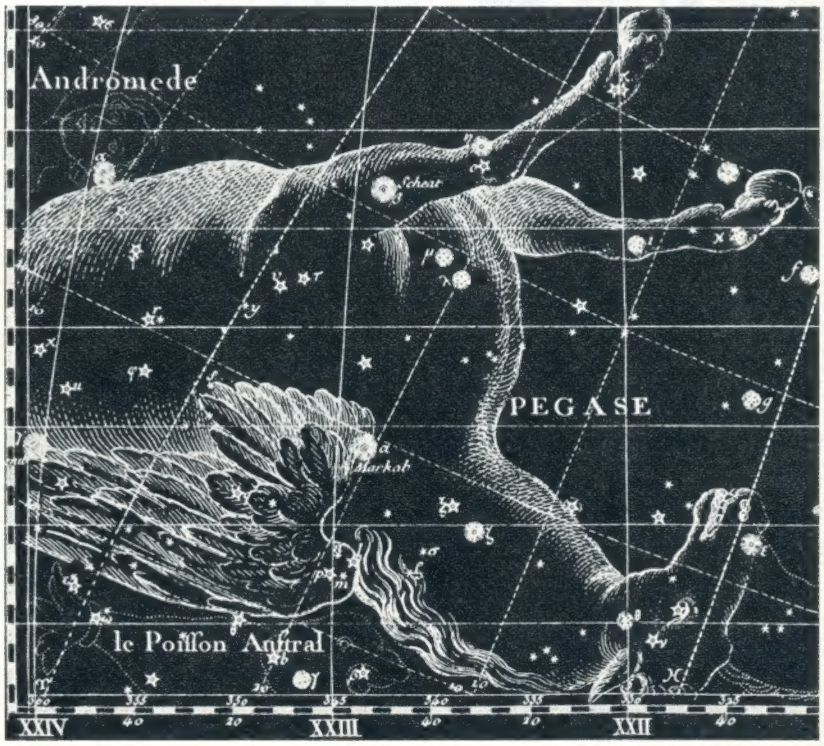
羽のはえた名馬〝ペガスス〟

水野良平

ちょうど今ごろになると，〝ペガススの四辺形〟として親しまれている星座がよく見えます。1等星はひとつもありませんが，2等星と3等星からなる4つの星がほぼ正方形に並んでおり，その四角のなかには星が見えないので，たいへんよく目だちます。

この〝ペガスス〟というのがおもしろい動物で，翼をもったウマなのです。ウマに羽がはえているなんて変な話ですが，ギリシャ神話によると，むかしエチオピアに大嵐があったとき，国王はその嵐を海神の怒りと思って，これを静めるために自分のかわいいひとり娘のアンドロメダ姫を，いけにえにしようとしたのです。かわいそうに，なんの罪もないアンドロメダ姫は，両手を鎖にしばられて，波の打ち寄せる岩の上でさらしものにされました。波は容赦なく打ち寄せて，姫の頭から雨のように降りそそぐのですが，それぱかりではなく，〝ティアマト〟というものすごい化けクジラが，波の間から姫に襲いかかろうとしていました。

そのときです。どこからかいななきが聞こえたかと思うと，1頭のウマが近づいてきたのです。そのウマが〝ペガスス〟でした。このウマの上には，ギリシャの勇士ペルセウスという人が乗っていました。かれは南方の国で，他の怪物を退治してきた帰りがけだったのですが，たまたまこのエチオピアの海岸を通りかかると，たいへんな嵐です。見ると，波の打ち寄せている岩の上に，美しいお姫さまがさらしものになっているではありませんか。しかも，沖のほうからものすごい化けクジラが近づいて，姫をひとのみにしようとしているところです。



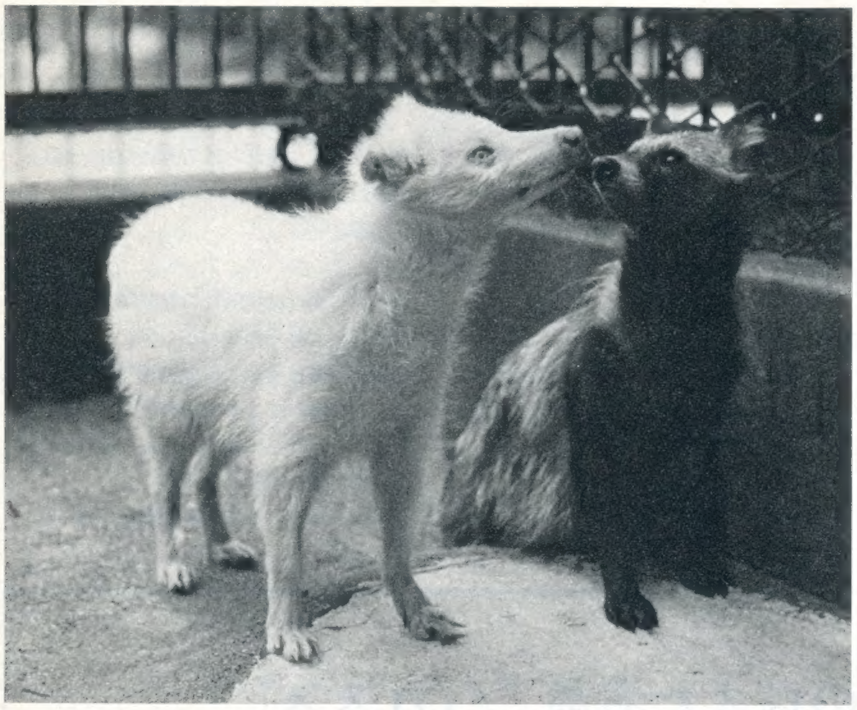
〝ペガスス〟フラムスチード「天球図譜」（恒星社編）より

これは一大事と，さすがは名だたる勇士です。さっそく海にとびこんで，このクジラをみごとに退治してしまいました。クジラが死んでしまうと波もおさまり，さすがの大嵐もすっかり静まってしまいました。ペルセウスは気を失ってうなだれているアンドロメダ姫の鎖を絶ち切って，父王ケフェウスのもとに連れもどしてやりました。

このときかれの乗って来た愛馬ペガススが非常に速いウマでしたから，見ていた人が，「飛んでいるのではないか」とでも思ったのでしょう。そんなわけで，あの嵐のなかを非常な勢いでペガススが近づいてくるのを見た人が，他の人に話して聞かせるときに，「あのときは，ウマが飛んできたよ」とでもいったのでしょう。それを聞いた人が「へえ！ それじゃあ羽でもはえていたのかな？」と考えたのかもしれません。

そんな話が何十年も何百年も語り伝えられている間に，とうとう，〝羽のはえたウマ〟というようなことになってしまったのでしょう。とかく神話とか伝説とかいうものは，話がおおげさになっていくものです。

しかし，この勇士ペルセウスも星座になっていますが，アンドロメダも，国王のケフェウスも，王妃カシオペヤも，また化けクジラも，みんな仲良く星座になって，秋の空一面に美しくひろがっています。■　（天文学者）



飼育自慢 3　白タヌキ

京都市動物園

この白タヌキは種名ではなく，ホンドタヌキのアルビノ，俗に白子と呼ばれるもので，全身に純白の被毛がはえている。皮膚，瞳孔も色素を欠いていて，マウスやカイウサギの白色品種のような赤い目である。

昭和37年12月15日に，京都府下の綾部市に住む四方真蔵さんが仕掛けたトラバサミにかかったもので，その日の午後8時ごろ，京都市動物園あてに「いらないか」という問い合わせの速達が届いた。それから5日後の朝，わたしたちは，日ごろ慎重運転で絶対に交通違反をしないという運転手といっしょに車で出かけたものの，どういうわけか，この日に限って7キロオーバーのスピード違反でつかまった。それも綾部市でのできごとだったので，白タヌキのタタリだなどとやいやい言いながら，しぶしぶ罰金を払ったものだった。

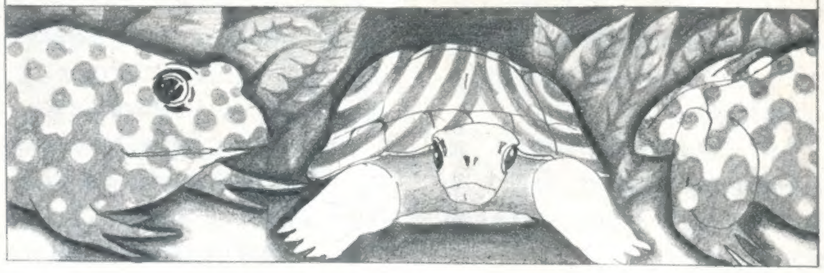
白タヌキは虹彩や脈絡膜の色素を欠いているため，目からはいる光線量の調節機能がうまくいかないらしく，いつもまぶしそうに目をしょぼつかせているが，その結果，失明する例も多いと聞く。当時の年齢は，約6か月ほどの若い雌だったが，当園にきてすでに8年半も過ぎているので，視力は低下し，まもなく失明するのではないかと心配している。

到着以来，ふつうの色をした雄タヌキといっしょに暮らしてはいるが，子どもを生んだことは一度もない。その後，綾部市で白タヌキがつかまった話もないので，この個体は突然変異の結果生まれたものだったのではなかろうか。■

（獣医師　滝沢晃夫）

▷**編集部より**：原稿入手後，動物園から連絡があり，この白タヌキは，残念ながら死んでしまったということです。

ペット相談室〈特集〉　変温動物の越冬（上）　杉浦　宏



冬が近づくと，今まで元気に泳いでいたキンギョやコイも，池のなかでじっとして動かなくなってしまい，夏の間元気にえさを食べていたカメも，首を甲羅のなかにひっこめたままじっとしているので，心配する人もあるようです。

今週，来週と2回にわたって，わたしたちの身近に飼っているペットのなかで，変温動物といわれる爬虫類，両生類，魚類などの〝冬越し〟について，どうしたらじょうずに寒い冬を過ごさせることができるかをお話しましょう。

動物は，哺乳類や鳥類のように，外界の温度にかかわらず，ほぼ一定の体温を保っている恒温動物（温血動物ともいう）と，動物のすんでいる周囲の温度によって，それぞれの動物の体温が変化する変温動物（冷血動物ともいう）とに分けることができます。日本のように四季の変化によって，かなりの温度差があるところにすんでいる変温動物をみると，夏の間はえさを元気に食べ，からだの代謝活動も活発に働き，成長し，繁殖していきますが，冬に気温や水温が低下すると，代謝活動は著しく衰え，動きも鈍り，水のなかあるいは地中などにもぐって冬を過ごします。この冬眠の状態をみると，死んでいるかのようにじっと動かないのですが，こうした状態で，えさなどのなくなった環境に耐え，春，温度が上昇してくるまで生きつづけるのです。気温や水温の低下とともに体温も下がり，心臓の鼓動や呼吸も減り，夏から秋までの間に体内にたくわえられた脂肪によって，冬の間を生きつづけます。

このように自然の状態では，変温動物たちは，それぞれ周囲の環境に基づいて生活を送るのですが，わたしたちがペットとして人間の支配下に置いた場合はそうはいかないので，いろいろな面について考慮してやることが必要です。

冬を過ごすのに二通りの方法があります。その1つは，自然界と同じように，温度の低下とともに冬眠させてしまう方法で，他の1つは暖房・保温などによって，夏と同じような状態をつくりだしてやる方法です。

冬眠させてしまう場合，どの変温動物にもいえることは，まず冬に向けての体力づくりをすることです。冬眠するまでに，からだにじゅうぶんな栄養をたくわえさせておかないと，冬眠中に死んでしまったり，春，冬眠からさめたときにすっかりからだが衰弱していて，病気にかかりやすい状態になったりします。

次に冬眠する環境をつくってやることです。といっても，気をつけなければならないことは，本などを調べて，カメは土のなかにもぐって冬眠すると書いてあると，穴を掘ってカメを埋めてやる人がいます。これでは，生き埋めとなってカメは死んでしまいます。あくまでも動物自身で，土のなかにもぐっていかせるようにしなければなりません。もぐれるような環境を，人間がつくってやるだけでよいのです。人為的に冬眠場所を用意するのですが，なるべく自然に近い状態をつくりだしてください。

夏と同じような状態で，冬を越させようという場合は，暖房しなければなりません。水のなかの動物なら，ヒーターとサーモスタットを使って，絶えず25°C前後を保つようにします。爬虫類や両生類の場合は，外気で呼吸しますので，ヒヨコ電球や白熱電球などを上から照らし，温度を保たなければなりません。■

（上野動物園水族館飼育係長）

裏表紙説明

フウライウオ　学名を *Solenostomus paradoxus* という。トゲウオ目カミソリウオ科の海産魚で，大きいもので全長15センチくらい。インド洋から太平洋へかけての海洋に5，6種が生息する。

からだは，両側から押しつぶしたように平たく，前方へ長くのびている吻も同様に平たくて，その前端に真上を向いた口がある。口のなかには歯がない。

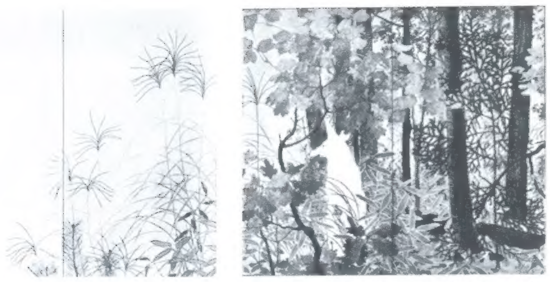
タツノオトシゴやヨウジウオの属するヨウジウオ科と，このフウライウオの属するカミソリウオ科の魚では，海藻とまぎらわしい色や形をもったものがある点など，似ているところが多い。しかし，タツノオトシゴなどでは，雄が腹部の嚢のなかで子を育てるのだが，このフウライウオは，雌がその役をする点，異なる。

カミソリウオ類を英語で ghost pipefishes（幽霊のようなヨウジウオの意）というが，あでやかな，かわいらしい幽霊ではある。■　（撮影　益田一）

（文　阿部宗明　農林省東海水産研）

▶**おことわり**　本号『もうひとつの世界』『漢字のふるさと』は休載します。

白　狐　　　下村観山





1914年（大正３年）作
紙本着色　二曲一双　各185×206センチ　東京国立博物館蔵

秋深い山奥の木の間に，耳をぴんと立てた白狐が１頭，何ものかを見つめるようにじっと佇んでいる。画面いっぱい隅々に至るまで秋の草や葉が描かれているが，この白狐の周囲は妖しいまでに静まりかえって，物音ひとつ聞こえない。そこは，人間世界から切り離された，何か魔性のものの支配する別世界のような印象すら与える。そして，その世界に君臨しているのが，言うまでもなくこの異様な眼差しの白狐なのである。

この屏風は，大正３年再興美術院の最初の展覧会に出品されて，評判を呼んだものである。白狐の描かれている半双は，ほとんど隙間もないほど，ぎっしりと樹木や草葉で覆われているのに対して，もう半双の方は，逆に大部分を大きく余白として残して，両方思い切ったコントラストを作り出すよう考えられた構成は，もちろん意識的に計算されたものだろうが，この画面には，そのような理知的な計算が働いている半面，何かつかまえどころのない不気味さのようなものも見せている。もともと狐というものが，日本人の心情生活のなかで，つねに何か超自然的力を持ったものとして畏怖されて来たのだが，観山は，きわめて華麗な装飾的画面のなかに，われわれ日本人の心の無意識の部分に訴えるテーマを，見事に美化して表現することができたのである。いわばそれは，日本人特有の自然崇拝を造形化した，華やかな夢幻劇とも言えるだろう。■（高階秀爾）

第１号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

世界動物百科　通巻36号　昭和46年11月14日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



フウライウオ　　説明 30ページ

雑誌　0632－11／14